

きず。浪漫的と云はば或は便なる事もあらむ。」と論じてゐる。彼は、中世文藝復興以前の、非人間的な藝術から一步を脱して、人間的、知識的、寫實的の近世文藝の源を開くと同時に早くも十八世紀末の浪漫的運動の先驅をなしてゐる。文藝復興運動と十八世紀末の浪漫的運動の間に擬古主義の時代があつた。シエクスピイアは、併し、この時代を飛び越えてゐる。そこが、彼のえらい所である。

シエクスピイアの作風其他に就いては、逆もこゝに詳説する暇が無い。其戯曲の中最も有名なものは、「ハムレット」「オセロ」「リア王」「マクベス」の四大悲劇を初めとして、「ロメオとジュリエット」「テンペスト」「眞夏の夜の夢」「エニスの商人」「御意のまゝ」「十二夜」等である。「十億の心」を有つてゐたと稱せらるゝ丈あつて、性格描寫、心理描寫の微を極め妙を盡してゐる。就中「ハムレット」の懷疑を描いたあたりは近代人の胸にも強い共鳴を與へずには置かぬところがある。

シエクスピイアの戯曲について有名なものは、ミルトン(1688—1714)の詩である。彼は厳格な清教徒で、高遠な理想と強大な意志とを有つた詩人である。彼の詩の中最も評判の高いのは長篇の叙事詩「失樂園」一篇である。

ミルトン
失樂園

「失樂園」梗概——太古、日月未だ形を成さなかつた前、七天使の隨一たる大天使セエタン、天帝の位を慕はうとして、叛旗を翻し、軍敗れて奈落の底に追ひ落されたが、ちつとも屈せず大奈落の王となりて、多くの悪魔を部下にし、衆魔殿を築き衆魔會を開いて、捲土重來の謀を講じた結果、セエタン自ら單身で、新世界なる地球に遠征する事となつた。堂々の陣を張つて天兵と戦うては逆も勝てないので、詭計を弄して、燃ゆるが如き怨念の幾分

を満足せしめようとし、セエタンは蛇の姿と化けて、地上の樂園に入り込んだ。人類の始祖のアダムとイヴとは百花爛漫たる常春の世に、神恩の無限なるを喜びつゝ、勇武なる諸天使に守護されつゝ幸福に充ちた日を送つてゐたが、蛇と化けて此二人に近づいたセエタンは、甘言を以て先づ妻のイヴを欺き、禁制の智慧の樹の果を摘み食はせた。イヴに勧められて夫のアダムもやがてそれを食ひ食うた。セエタンは凱歌を奏して奈落に歸つたが、天罰は程なく下つて衆魔殿は瓦解し、多くの悪魔は、未來永劫土を踏めて生きる蛇と化した。かくて、衆魔は亡びたけれど、罪と死との二妖魔は、永く其記念として下界に残された。禁制を犯して墮落に墮落を重ねた後、アダム先づ悔い、イヴも亦悔いたが、天罰は遂に免れる事は出来ない。二人は遂に此樂園を逐はれてしまつた。

この「失樂園」の價值に就ては古來種々の説があつて、褒めるものは雄渾無比なる大叙事詩であるとし貶めるものは、冗長な不具な主觀詩であるとする。北歐の壯美を好むものはこれを讚美し、南歐の優美を愛するものは之を非難すると見て可い。とにかく、其思想の雄大な事と、其節奏の莊重な事とは、他に一寸比類が無い。彼は溫情の詩人ではなく、意力的な冷嚴な詩人であつた。彼は「失樂園」の後「復樂園」を作り、神の子基督を主人公とし、基督が罪を贖うて、一度失はれたる樂園を再び得ると云ふ事を歌うたが、これは「失樂園」程評判には成らなかつた。彼は、チャアレス一世を死刑にして、共和政府を打建てたオリバア・クロムウエルの祕書官で、又、清教徒唯一の大論客として知られた人であつた。ミルトンと同じく清教徒で、ミルトンより稍後れて出た作家に、ジョン・バンヤンがある。矢張り、非常な熱烈な信仰を有つた人で、宗教詩を書き、又宗教的な寓話などを澤山書いた。其作の中、「天路歷程」及び「聖戰」等は最も名高い。「天路歷程」は英吉利第一の比喻小説と稱せられて居る。

スキフ
ト、デフォ
オ、アディ
ソ

ジョンソン

ス、リ、スマ
ア、ド、チャ
ン、ド、チャ
イル、デイ
ング

諷刺詩を以て聞えたバトラア、ドライデン等を経て、十八世紀に入ると、散文が漸く盛になつて、スキフト、デフォオ、アディソン、フィイルディング等の散文家が種をついで出た。併し詩人としてはポオブの名を忘れずはならぬ。スキフト(1667—1745)は辛辣諷刺家で其作、「桶物語」等に於て骨を刺すやうな冷罵を恣にして居る。多くは其當時の英吉利の社會状態や政治状態を對象としたもので、其作の中最も有名なのは、「ガリヴァ旅行記」である。船醫のガリヴァと云ふ男が、航海中破船によつて、第一に小人國第二に大人國に漂着したと云ふ事實を藉り、小人國大人國の描寫に託して當時の政治風俗を罵り、第三に空中の飛行する島へ行つた事を描いて哲學者を諷し、第四の馬の國では馬が道理を解し、人間が獸類になつて居ると云ふ事を描いて、この篇では人類一般に痛快な罵倒を浴せかけて居る。諷刺文學に於て古今東西を通じて彼に及ぶ者は先づ無からう。デフォオ(1661—1731)は少年の讀物として持囃される「ロビンソオクルウソオ漂流譚」の作者で、英國小説の開祖と云はれて居る。彼の作はよく、英吉利人の冒險癖に投じたので、その作は純文學としてはたいしたものでは無いにも拘らず、非常に名聲を高めた。夫から、アディソン(1672—1719)は、道徳的思想と、輕妙な滑稽趣味とを調和して、これも能く英吉利人の好尚に投じ、その輕快無比の才筆は一世を動かした。彼は詩も作り、論文をも書き、論客としても可成り重要な地位を占めて居たが、矢張りその得意とするところは散文にあつた。

十八世紀の後半期に至つて、トムソン、グレエ等の詩人が出た。グレエは、「山々かすみ入相の——」。

と云ふ譯詩を以て知られて居る「墳上の感懷」の作者として、日本の詩壇に特に縁の深い人である。散文は益々盛で、ジョンソン(1709—1884)が中心であつた。これまで、文學者は大抵王侯の保護の下に筆を執つて居たのだが、ジョンソンは飽迄平民的な獨立主義の人で、文學を以て生計の道とする事を創めた。其作では「ラセラス」と云ふ教訓的の物語が最も名高い。ジョンソンと親交のあつた詩人ゴールド・スミス(1738—74)は、詩のみではなく、散文にも戯曲にも手を着けて、何れも相當の効を収めて居る。小説には「ウェエクフィールドの牧師」最も名高く、其他田園詩や歴史物語の作が少くない。ゴールド・スミスに先立つて、小説界に新派を開いたリチャアドソン(1789—1761)の名も記憶せねばならぬ。従來の小説は、例へばデフォオのその如く、事件の記述を主として居たのが、リチャアドソンに至つて、人情の機微を穿つを旨とした、人間本位の小説が創められたので、其代表作に「クラリッサ・ハアロオ」の一篇がある。リチャアドソンに次いで、リチャアドソンよりは更に高い文學上の地位を贏ち得た人に、フィイルディング(1724—54)があり、彼の作には、當時に於ける英吉利の生活がよく現はれて、後年に至る迄寫實小説の模範と稱せられて居た。其他、スモオレット、シェリダン等の作家も名位は記憶して置く必要があるであらうし、又此時代に「羅馬興亡史」の著者として名高いギボンその他の歴史家が輩出した事も忘れてはならぬ。

浪漫主義
の先驅

十九世紀に入れば、英吉利文壇の浪漫主義全盛期となる。が、其萌芽は、既に十八世紀の末に現はれ

て居る。たとへば、スコットの傳奇小説の先驅とも云ふべき恐怖派の小説などがそれで、此派の小説には古城の秘密とか妖怪とか、すべて超自然的な怪異なことが描かれて居る。又、これ等を浪漫主義の萌芽と見る時自然主義の萌芽とも見る可き自然詩人の群も既に此時に於て出て居る。(自然主義も浪漫主義も或點に於て共通し、この共通する點から見れば、自然主義即ち浪漫主義だ。)その重なるものは、クウバア、ブレエク、バアンス等である。それ等については次に説かう。

(三) 浪漫主義時代

形式的より内容的へ、知巧的より自然的へ——これは、浪漫主義にも自然主義にも共通した傾向である。而して、かうした傾向を以て浪漫主義の先驅を爲すと共に、自然主義の源を開いた人は、クウバア、ブレエク、バアンス等である。クウバア(1731—1800)に見られる自然的傾向はトムソンにもこれを見る事が出来る。トムソンも、クウバアも山野の自然を愛して、その自然美を歌ひ、形式の束縛から脱して、感情の流るゝまゝに歌うた。ブレエク(1757—1827)もバアンス(1759—96)も、其情熱的な詩風を以て、唯冷たい知巧に固まつて居た従來の詩を改革したが、ワアズワアスに至つて、最も明かに浪漫主義乃至自然主義的傾向を示して居る。

ワアズワ

ワアズワアス(1770—1856)は、コオルリツヂ、サジイと共に湖畔詩人と稱せられる。國木田獨歩を動か

クウバ
ア、ブレ
エク、バ
アンス

アス

して、日本の自然主義の原動力の一つとなつたのは彼の詩であつた。彼の自然に對する愛は、トムソンやクウバアなどよりも一層深く、殆ど宗教的に迄なつて居る。彼は唯自然の現象を見るばかりでなく、其内部の生命に觸れた。自然は神靈の發現である、自然を観るは、即ち神靈に接することであると考へて、彼は自然の素朴幽寂の中に靈妙なる光を仰いだ、而して自然の中に、自己を没して、その自然と一つに融け合ふ自己を認めた。「母なる大地」^{マザー・アース} 彼は自然と同化するところに大なる法悦^{エクスタシー}を味うたのである。而して、形式に於ても従來の詩の様に、徒にこちたき粉飾に耽る事なく、どこまでも素直な平明なありふれた言葉で歌ひ出でた。「詩は力ある感情のおのづからにして溢れ出でたもので無ければならぬ。又、自然の印象のさながらの表現であらねばならぬ。従つてその題材を日常普通の田園生活より採り、實際日常の言葉を以て之を歌はねばならぬ。」とは彼の主張したところで、彼の詩は、この主張を體現したものに外ならなかつた。内容的、自然的、而して飽迄も平民的なところ、彼は正しく近代自然主義の先驅者であつた。その作には、「ティンタン精舎の數里の水上市にて詠める歌」「幼時を追懐して不滅を知る歌」「吾等は七人」「最後の小羊」等がある。コオルリツヂ(1772—1834)は、沙翁以來の天才とさへ云はれて居るが、其作は多く断片的である。彼は非常に神祕的空想に富んで居た。而して彼は批評家として亦傑れたる見識を示して居る。

スコット

優艶無比の叙事詩「湖上の美人」^{レイディ・オブ・ザ・レイク}の作者として名を知られて居るスコット(1771—1832)も、浪漫主義の

先驅者として重要な地位を占めてゐる。詩人としての外小説家としても傑れてゐた。所謂傳奇小説^{ロマンチクス}で、寫實的の技倆にはあまり感服は出来ぬが、材料の豊富な事、結構の雄大な事は他に及ぶものは無い。明治の初期の文壇に於て、リットン、ジスレイイ等と共に、盛に持囃されたのは、彼の傳奇小説である。しかし、彼は其思想に於て、其情熱に於て、到底ワアズワアスやコオルリツヂには及ばない。

バイロン

斯くて浪漫主義が最高潮に達した時、バイロン、キイツ、シェリーの三詩人が現はれた。此三人者は英吉利浪漫主義文學の代表者ともいふ可きもので、就中熱烈を極めたのはバイロン(1788—1824)であつた。彼の作は、飽迄も反抗的破壊的で、焰々として燃ゆるが如き情熱が字々句々の間に籠つてゐながら、一面、非常に憂鬱な哀傷的なところに、所謂「世紀の痼疾」の惱みを示してゐた。其作には、「チャイルド・ハロルド」「カイン」「マンフレッド」「ドン・ジュアン」等がある。餘りに奔放な大膽な詩風は堅實を愛する英吉利には容れられずして寧ろ大陸の文壇に騒がれた。彼の作の主人公は皆何れも彼自身であると云はれるほどに個人的色彩に富んでゐて、この點が喜ばれもすれば嫌はれもした。彼の情熱と彼の美貌とは、自ら彼をして放縱の人たらしめ、彼は道德上の非難から、故國を追はれて一生の大半を他國に放浪し、晩年希臘の土耳其に對する獨立戰爭に參畫して大にならんとしたが、志を遂げずして死んだ。彼は一個矯激なる革命兒であつた。

シェレン

實生活の束縛を厭ひ、天外の理想郷に憧憬する事の甚だしきシェレン(1797—1859)の如きは稀である。

ツイ、キイ

彼の詩には、バイロンほどの情熱はないが、縹渺たる神韻があり、而して玲瓏玉を轉ばす如き聲調の美がある。彼は、バイロンとも親しく、キイツの死を悼んだ「輓歌」「アドネイス」の如き殊に傑作の稱がある。その他「雲雀」「西風の歌」「悲嘆の賦」等に抒情詩人として古今に獨歩する技倆が示されてゐる。キイツ(1795—1821)は薄倖短命の詩人である。其詩風は、しつとりと落着いて、月光のやうな感味をもつてゐた。「眞は美也、美は眞也」といふのが彼の信條であつた。其傑作は、「ハイピリオン」「セント・アグネスの連夜」「希臘古瓶の賦」である。バイロン、シェレイと、此キイツとの三人は、各風格を異にしながら、其反抗的精神に於て、其理想を追ひ純美を求むるの精神に於て、互に相共通し、以て、浪漫主義の中心を形造つてゐる。

テニスン とブラウ ニング

浪漫主義は、知識に對する感情の反動から生れたものである。しかし、十九世紀の科學的精神は、感情にのみ耽らせては置かぬ。そこで大陸には浪漫主義の反動として、自然主義が勃興したのであるが、穩健な英國の文壇に於ては斯く極端から極端に走る事なく、先づ浪漫主義の感情的傾向と、自然主義の知識的傾向とを調和して行かうとした。テニスン、ブラウニング等の詩がそれだ。テニスン(1809—92)は何と云つても、ギクトリア女王朝の文壇を背負つて立つた大立者で、たいした獨創は無かつたが、よく諸家の長所を併せ得て、渾然とした詩風を完成した調和的天才で、擬古主義のやうに形式にのみ墮せず、さうかと云つて、唯内容をのみ旨として形式の不具を顧みぬやうな浪漫主義の弊にも墮せず、感情と知

識、宗教的情緒と科學的精神とを程よく調和し得た。その作中最も名高いのは、「イン・メモリアム」「イ
ノック・アアデン」等である。ブラウニング(1812-89)はテニスと並び稱せられるが、其詩風はテニス
の典雅優麗には似もやらず、非常にどづ／＼とした解りにくいものである。が、思想の深遠な事は、テニ
スの及ぶところでは無く、詩人としてよりも思想家として、寧ろより高い地位を占む可き人である。
其作で名高いものは物語體の「ゼ・リング・エンド・ブック」劇詩「ヒッパ・パセス」等である。その夫人もまた
閨秀詩人として知れてゐる。

テニス、ブラウニングの二詩人は、知識と感情との調和した境に其詩風をうちたてたが、飽迄も感
情に趨かうとしたものに、ラファエロ前派(P.R.E.)がある。此派の領袖はロセッチ(1828-82)で、激しく
當時の科學的精神に反抗し、中世的精神を甦らせ、熱烈奔放の感情を歌うた。戀愛詩人として彼は古今
獨歩の稱があり、其戀愛觀は肉感的で、同時に神祕的である。小曲集「生命の家」が最も知られてゐる。
其妹のクリスチナ・ロセッチも亦閨秀詩人として知られ、其詩は宗教的熱誠に燃えてゐる。ラファエロ前
派とは、當時の繪畫界の新運動に名づけたもので、ロセッチは畫家としても可成の地位にあつた人であ
る。ラファエロ以前の畫風に従はうとする一派で、古名畫の描寫などからはなれて直に自然について描
くを旨としたところの唯美派である。
ラファエロ前派から出て、テニス、ブラウニング以後十九世紀末までの詩壇の主權を握つてゐたの

ラファエ
ロ前派
テ
ロセツ

は、スキンバアン(1837-1909)である。かれはバイロンの再生とも云ふ可き革命的熱情的の詩人で、其抒
情詩には、官能的、肉感的なものが多い。又其巧妙精緻を極めた韻律は、英吉利文學中無比の稱がある。
彼は又批評家としても傑れた見識をもつてゐた。ラファエロ前派の飽迄も感情に趨つたのに引きかへ、
知識の方面に深入りして、懷疑の苦悶を歌うたのはマッシュ・アアノルド(1832-88)である。

其他、キップリング(1865——)は、小説家としても知られてゐるが、詩人としても名高く、男性的な力
強い詩風を以て帝國主義を宣傳し、イエーツ(1858——)は愛蘭の詩人として特に注目せられる。イエーツ
は空想の豊かな詩人で象徴的な神祕的な其作風は新浪漫主義の傾向に屬してゐる。

其他の諸
詩人
イエーツ

(四) 寫實主義乃至自然主義的傾向

英吉利文學の中心は詩歌であり、殊にその浪漫主義時代を形造るものは、殆ど詩人ばかりで、スコット
の如き小説家もあるが、しかし、其本領は矢張詩人たるにあつた。リットン、ジスレリイは何れも政治家
で、其作品も政治的色彩に富んでゐる。是等の人々は、皆傳奇的傾向を追うてゐたがディッケンス、サッ
カレエの二人が出るに及んで、寫實主義的の傾向に向つた。ディッケンス(1812-70)は、好んで下層社
會の生活を描き、其作風には温味があつて、ユウモアに富んでゐた。「ピクキック・ベエパアズ」「クリスマ
ス・カロール」「デギッド・カッパファイイルド」等が其代表作である。ディッケンスが好んで下層社會を描い

寫實的
傾向
ディッケ
ンスと
サッカ
レエ

たのに對し、主として上流社會の人物を描いて成功したのはサツカレエ(1811—68)で、ディッケンスの作には温味があるが、彼の作は冷たい。その冷やかに世相を観るといふ點から、客觀描寫に於ては、儘にディッケンスを凌ぎ、ディッケンスのユウモアに對し彼は皮肉に富んでゐる。其代表作は「ヴニティイ・フェア」の一篇である。

心理的傾向
エリ奥特
とメレ
ディ
ス

ディッケンス、サツカレエと同時代に出て、閨秀作家として名を馳せたエリ奥特(1819—88)は、心理描寫に於て非凡の手腕を示した。エリ奥特以後の小説には、心理的傾向が益々著しく、これが小説界の主^{ノイニカアレント}流となつた。で、此主流の代表者としては、メレディス、ハアデエの二人を擧げる事が出来る。メレディス(1828—1909)の代表作は、「ゼ・イゴイスト」で、強い意志を有する主我主義者^{イ・イ・スト}は彼の好んで描くところで、其心理描寫はエリ奥特よりも一層鋭利で深刻で、而して彼の作にはエリ奥特に見る事の出来ぬユウモアがあり皮肉なところがある。暗澹たる現實生活を寫しながら、其彼方に何等かの光明を認めようとするところに光明的な英吉利人氣質を見る事が出来る。メレディスの文章は、非常に簡勁であるが、夫と共に晦澁の難があつて、ブラウニングの詩によく似てゐる。

自然主義
ハア
デエ

佛蘭西自然主義の影響を受くる事最も深かつた作家はハアデエ(1840—)で、その境遇遺傳の力を重んじ、自然の前には、人間はどうする事も出来ぬといふ機械的的人生觀には、明かにゾライズムの感化が見られる。其作は皆冷靜な描寫の態度、皮肉を交へた厭世的の調子に貫かれてゐる。彼は好んで田園生活を描き、地方色の描寫に長けてゐた。自然と人間との關係を有機的なものに見るところに彼の自然描寫の精神がある。彼は又女性描寫に傑れてゐて、よく女性の弱點を描いた。其代表作「ダアバヴィル家のテス」は、テスといふ少女が遺傳と境遇との爲に壓迫され翻弄されて墮落の淵に沈み、悲惨な最期を遂げる徑路を描いたものである。

ジエム
ス

ヘンリー・ジエムス(1813—1916)もまた近代英國文學に於ける大名である。彼は、プラグマチズムの創建者と知られる有名な大哲學者ウィリアム・ジエムスの弟で、夙に心理小説の大家として聞え、その作は、深遠なる哲學的思想を藏するを特色とする。「一婦人の肖像畫」「鳩の羽」等の作がある。ハアデエ、メレディス、ジエムス——この三人を以て、英國近代文學の三尊とする者がある。

ジョ
ムウ
ア

ハアデエより一步を進めて、保守的な英國の文壇に於て自然主義の態度を比較的大膽に徹底さして行つたのは、ジョムウア(1833—)である。その作の中、或る畫家の情事を寫して精緻を極めた「近頃の戀人」、又、墮落の淵に沈み行く女の一生を描いた「役者の妻」などはよく此の作者の因習打破の自然主義的態度を顯はしたもので、兩性關係や下層生活を解剖した偽りなき描寫だけに就いて云へば、殆どフロオベル、モオパスサン等と何等の異なる所は無い。

ステイ
ン
グ
ン
グ
ン
グ

ディッケンス以後英吉利小説壇の主流をなすものは寫實主義乃至自然主義的傾向であつた。が、傍流として、スコット以來の傳奇的傾向を追うてゐるステイヴンソン(1835—94)がある。彼の作は其代表作

「寶島」を見ても判る様に、高等冒険小説とも云ふ可きもので、よく英吉利人の冒険癖に投じたものである、即ち彼は純文藝の士といふ可きは、あまりに通俗的であるが、しかし、其想像の豊富、其描寫の精到、容易に他の及びがたきものがある。中心思想は、もとより空想的であるが、其細部に至つては、飽迄も寫實である詩人キップリング(1855—)の小説も、ほど、ステイヴンソンと同じ様なもので、彼は印度を舞臺として、白人と土人との争闘等を描き、其題材乃至精神は皆冒險的傳奇的であつたが、其部分々々の描寫に至つては、自然主義作家と雖も及び難き精細な寫實の筆を以てしてゐる。一方には餘りに血腥く、餘りに殺伐で而して餘りに戯曲的だといふ非難もあるが、其剛健なる男性的の作風に、他の學び難き特色が存してゐる。「ジャンケル・ブック」の作が聞えてゐる。

而して、その他、現代の桂冠詩人たる榮譽を擔つてゐるロバート・ブリッチス(1854—)、象徴派の詩人として知られ、批評家として、また「文學上に於ける象徴主義運動」の名著を有するアーサー・シモンズ(1859—)、詩人として批評家として北方文學の最初の紹介者として聞えたエドモンド・ゴス(1825—)、トルストイと相並んで二十世紀の豫言者と尊ばれてゐるカーペンタア(1844—)等についても大に説かねばならぬが、こゝにその餘裕のないのを憾みとする。

其他、探偵小説の大家たるコナン・ドイル、自然主義的傾向の作家ギツシング、諷刺的滑稽小説の作家たるジェローム・ケイ・ジローム等の名も記憶して置かねばならぬ。海上の生活を描いて有名な人にジ

その他の
諸作家

セフ・コンラッドがある。これ等の人々については更に説くところがあらう。

(五) 愛蘭文學の勃興——劇壇の一瞥

ケルト族
の文學

屢々繰返して來たとほり、英吉利文壇は中正と穩健とを旨とした文壇である。それは、英吉利人が北方民族と南方民族との合の子で、兩方の中和した民族だからである。が、南方民族を代表するケルト族が、近頃政治上にも、社會上にも、文學上にも力を得て、文學上に於ては愛蘭文學の勃興となつた。愛蘭はケルト族の地方である。此急進的なケルト族の文學の勃興によつて英吉利文壇の平凡は破られた。詩人イエーツも、小説家ジョージ・ムウアも愛蘭人として英吉利文壇の一異彩を成したものであるが、オスカ・ワイルド、バアナアド・ショウの二人の如きに至つては、平凡な穩健な英國文壇に、どうしてこんな人が出たらうと疑はるゝほど矯激な峻烈な作風を示してゐる。

凡そ近代文學者の中で、オスカ・ワイルド(1856—1900)ほど、矯激な藝術觀、奇抜な人生觀を有つてゐた人は無い。彼は唯美派即ち美至上主義の作家で、ラファエロ前派——ロセツチ、スキンバアン等から脈を引いてゐる。ラファエロ前派は、肉感的、人工的をその特色としたが、ワイルドの藝術にも此二特色が著しい。彼の藝術のいかなるものであり、又その藝術のいかなるものであるかを知るには其代表作たる「ドリアン・グレエの肖像畫」を一讀せねばならない。次に、其梗概を擧げて置く。

オスカ
ワイル
ド

「ドリアン・グレエの肖像畫」梗概——ドリアン・グレエは、二十許りの世にも珍らしい紅顔の美少年であつた。畫家のハルワアドは、いたくドリアンの美に打たれ、その美を永へに傳へんとて一心こめてドリアンの肖像を畫く。この畫家の友にヘンリー・ワットンと云ふ極端なエビキュリアニズムの主張者があつたが、畫室で偶々ドリアンと落ち合ひ、未だ世馴れぬ無垢純潔なドリアンに、自分一流の快樂主義を説いて聞かせた。曰く、この世で最も望ましきは快樂である。而も官能的肉體的の快樂である。だから、人間は常に官能の作用を鋭敏にして肉體上の快樂を享受するやうにしなければならぬ。そして、かうするには若いうちに限る。況してドリアンのやうな天成美貌の人は尙更であると。ドリアンは格別氣に止めず聞き流したが、やがて出来上つた彼の肖像畫を見るに及び、今更ながら吾と吾が美貌に惚れ惚れした。そして、ふと何時迄この若い美しさが續くかと考へて、心が急に滅入り込む。同時に、ワットンの快樂主義が力ある要求となつて彼の胸に浮んで來た。彼は永へに若く美しく、而して永へに又肉的快樂を享受しようと思つた。で、心の中で恐ろしい祈りをした。曰く、實在の自分は、このカンパスの上の自分に乗り移れ、そしてカンパス上の假我の自分は實在の我れと所を變へよ。これから後、ドリアンは全く快樂主義の權化となつて、思ふさま肉の香りに耽溺した。その官能の慾を充たすためには、種々な殘忍刻薄な事をも致した。かくして十八年過ぎた。而も不思議に彼は若く華やかで、二十歳の紅顔そのまゝであつた。が、いつしか彼は官能の刺戟にも物うくなつた。肉の香りにも厭きて來た。つくづく過ぎ來し方を思ひめぐらした。堪へがたき不安と懊惱とが一時に込み上げて來た。彼は一夜潜かに、人知れず秘して置いた肖像畫を取出して見た。こは如何に、肖像の髪は灰色となり、額にも頬にも瘰癧の皺が深く刻まれ、唇には血腫き迄、血が滲み出て居た。即ちドリアンは、このカンパスの上に始めて十八年間の實在の自分を見たのである。彼はこれを凝視するに堪へず、ナイフを揮つて、肖像畫の胸元深く突き刺した。時ならぬ叫び聲に人々が駆けつけて見ると、ドリアンは吾と吾が胸元を抉つて斃れて居た。尙ほ人々の驚いたことには、今迄美しく若かつたドリアンは、穢い醜い殘忍の相貌の老人と變つて居たことであつた。そして屍の傍の壁にはドリアンの肖像畫が立掛けてあつて、これは若い美しい今迄のドリアンの面影そのまゝのものであつた。

「この世で最も望ましきは快樂である。快樂の中でも、官能的、肉體的の快樂である。であるから人間は常に官能の作用を鋭敏にして肉體上の快受を享樂するやうにせねばならぬ。」といふ此作中人物の言葉は、即ちワイルド自身の中心思想を語つたものである。唯美主義を以て、彼は藝術上のみで無く、實行上の主義とした。人生の最高の目的は、感覺的の快樂を享くるにある——一言すれば、これが彼の人生觀で、彼は實に近代の享樂主義代表者である。

ワイルドの藝術觀

ワイルドは「架空の頽廢」と云ふ對話體の論文に於て、其奇矯な藝術觀を述べて居る。謂ふ所の架空と「美にして而も實際ならぬ物語を語る事」即ちロオマンズと云ふ程の意味である。一篇の要旨は、近代、ロオマンズが廢れて、寫實主義がひとり盛んになつたのは藝術の墮落である、藝術は自然人生を模倣するものでは無く、自然人生こそ藝術を模倣す可きものであると云ふので、極端な藝術至上主義の論である。昔から藝術は人生の鏡と云はれるが、實は人生こそ却つて藝術の鏡である。ハムレットが描かれて、はじめて厭世主義が生れ、ツルゲエネフの小説によつて、始めて虚無主義ニヒリズムが生れたのである。藝術は人生そのものを寫生し模寫するのでは無く、即ち、人生に倣うて藝術を作りあげるのでは無くして、人生が藝術に倣ふのだ——これが「架空の頽廢」の要旨である。で、彼は更に吾人が藝術に對して要求するのは、特異なことと、魅力チャームと、想像力と、即ち一言すれば美である。而して、其美は、吾等の實生活の利害とは、全く交渉の無いものでなければならぬと説いて居る。従つて彼の藝術は、全く實人生とはかけはな

れたもので、飽迄も技巧アン・タイライヤム的なものであつた。彼の藝術が技巧的であつたばかりで無く、彼の實生活も亦極めて技巧的であつた。享樂主義と云つても、唯肉欲即ち本能慾を満足させると云ふ事を旨としたものとは異なつて、香とか色とか、音とかによる快樂——洗煉された官能の快樂を趁ふディレクタント風なところに彼の特色がある。彼の藝術は近代人の神經過敏から生れたもので、要するにデカダンの藝術である。

サロメ

「ドリアン・グレイの肖像畫」の外、彼の作中で最も名高いものは、戯曲「サロメ」で、「ドリアン・グレイの肖像畫」と等しく、道學先生的な英吉利氣質から見ると、随分非難の多い作であつた。「獄中記」は、彼が男色事件で罪を得て入獄した際、獄中で書いた一種の感想文で、悲哀の中に美を認め悲哀そのものをまです享樂しようとする享樂主義の徹底した境が語られて居る。其文章は頗る典雅優麗で、英吉利文壇の逸品として知られて居る。彼は、又頗る坐談に妙を得て、その警句集は有名なものである。「彼は席上で、何か、眞面目な又は空想的な説などを必ず述べ立てるが、その場合、人々は、いつも彼の潑刺たる機智頓才、及び該博な知識、深奥な見識に驚かされる。その機智諧諷の潑刺たるを譬へれば、丁度夏の電光のやうなもので、その閃きの人を驚かすものはあつても、人を害ふことなきと似て居る。彼の生前に生れ合せて、而も彼の話を聞かないのは、恰も雅典アテニスに住んで、パルテノンを見に行かないやうなものである。」と彼の友人ギイドは語つて居た。

バアナ
アド・シヨ

現代戯曲作家として名高いバアナアド・シヨオ(1855—)は、「己は標本的な愛蘭人だ」と自らも云つてゐる通り、愛蘭人の特性を最も強く發揮した人である。愛蘭人は、非常に奔放で、心に蟻りが無い、自身を信ずるところを以て、周圍に憚らず突進して行く。ワイルドに見た挑戦的な態度は、シヨオにも著しい。「合理的な人間は、自分を世間に適應せしめようとする。非合理的な人間は、世間を自分に適應せしめようと頑張る。だからあらゆる進化は非合理的な人間によつてなされるものである。」とは、シヨオの言葉であるが、此の、「世間を自分に適應せしめよう」とする態度は、ワイルドにもシヨオにも著しく見られる。自分の氣に入らないものはどしどし破壊して、此世界を自分の住心地のよいものに改造して行かうとする——これがシヨオの態度である。が、シヨオは決して單なる利己主義者ではない。彼は、確乎とした哲學の上に立つて萬人の爲めに社會を改良しようとする理想を有つて居るのである。彼の哲學の基調をなすものは、彼の屢説くところの、所謂「生の力ライフ・フォース」である。これは、シヨウベンハウエルの所謂「世界意志」だが、しかし、シヨオは夫に就いて、シヨウベンハウエルのやうに消極的な考へ方はしない。シヨウベンハウエルは、此意志を抑へつけて、涅槃の境に入るを目的としたが、シヨオは、智力によつてこの盲目的な意志を自覺的に押し進め、この人生を暗きより明るきに導いて行くところに、生の充實があり緊張があり、其處に幸福があると考へる、飽迄も積極的な考へである。けれども、彼は幸福を人生の目的だと考へるのでは無い。「幸福や美は副産物だ」とも云ひ「阿呆とは美や幸福を直接追ひ求

めることだ。」とも云つて居る。たゞ、吾々は全力をあげて生きるばかりだ、生の緊張充實は其處から自然に幸福は湧いて来るのだ。だから、幸福を味はうとする人は、現實生活の何物をも避ける事なく享け入れる謙讓の心と、勇氣とを有たねばならないと説いて居る。かう云ふ立場に立つて、シヨオは現代生活に對して忌憚なき批評を加へた。彼の戯曲は、其批評に外ならない。彼は、鋭い智的洞察力を以て、現代生活の底の底まで觀察し、暴露し、而して解剖した。此社會を沈滞腐敗から救はうとし、機智や皮肉や諷刺やを以て、群衆を刺戟し自覺せしめようとした。彼の藝術は徹頭徹尾人生の爲の藝術である。「たゞ藝術の爲めと云ふなら、一言半句も書く努力なぞしようとは思はぬ。」と自ら云つて居る。彼は人生を少しでもより良き状態に進めようとして、社會の缺陷をあげき、偽善を破り幻影を亡ぼし、因習を攻撃したので、彼の破壊は決して破壊の爲めの破壊ではない。其作中の人物の口を假りて、シヨオは次のやうに云つて居る、これが彼の全面目である。

一體私は自分より何かもつとよいものがあると思はれるうちは、どうしても努力して、それを實現せしめるか、それに行く道を切り開かずには、ちつとして安閑としてゐられない。それが私の生活の法則だ。それが私の内部にあつて、ライフが絶えず、より高い組織、より廣く、より深く、より鋭い自覺、より明かな自己理解とを渴望して止まない働きである。

シヨオは、自分の作る戯曲を、「面白い劇」と、「面白くない劇」の二種に分けて居る。が、概ね喜劇である。そして皆、痛烈な皮肉に充ちて居る。茶番的な滑稽に腹を抱へさせるやうなものもあつて、時に

シヨオの
作風

不眞面目らしく思はれるが、しかし、一見不眞面目らしく見える其裏面には、血の出るほどの眞面目があるのである。其作中最も有名なのは「ウオオレン夫人の職業」「人と超人」「ユウ・ネヴァ・キャン・ナル」等である。次に、「ウオオレン夫人の職業」の梗概を擧げよう。

「ウオオレン夫人の職業」梗概——（序幕）ウオオレン夫人の娘ギギイは高等教育を受けた、聰明な、てきぱきした女だ。今年二十二歳だが、極めて實利的な考へをもつて居て、丁度その時尋ねて来た四十恰好の美術家のアレックトに「では貴女の生涯にはロオマンズもなければ、美も無いんですか」と云はれては、「私はそんな者は何とも思ひません。私はたゞ働いて、報酬をうけて、疲れたら椅子にゆつくり倚つかゝつて、紙煙草でもふかしてウイスキーを少しに、探偵がかつた小説でも讀むのが何よりです。」と答へるほど實際的な女だ。そこへ、ウオオレン夫人は、新男爵クロッフを連れて歸つて来る。夫人は既に四十五六、初老を越してはゐるが、なか／＼美しい。クロッフは五十ばかりの、野獸の本性を紳士の衣に包んだ男だ。「僕はどうもあの娘が慕はしいやうな氣がするが、事に依つたら僕がその親父なんぢやないかと思ふ。」彼は娘を手に入れようとして、未だ此の問題の解けぬ爲めに悩むのである。青年フランクはギギイに戀してゐる。その父がアドナアといふ牧師もやつて来て、ウオオレン夫人と顔合せると、意外！ 牧師は夫人が昔の馴染で、クロッフも同じ遊び仲間である。（第二幕）クロッフは、ウオオレン夫人に、ギギイを與へよと云ふ、果は互に罵り合ふ。そのあとで、ギギイは母に對して、自分は自分で身を立てゝ行かうと思ふと云ひ、「私の望む職業は、誰も知つてゐますけれども、貴女は——貴女の職業は誰が知つてます。泣聲を立てなくてもよござんす。母の權利と仰しやるけれど、貴女は全く私の母ですか。では誰が私の父です。事によつたら、あの厭な奴——クロッフ——の悪い血がこの脈管に流れてゐるのでは？」と母を詰る。「そんな者でだけはたしかに無い——」と母は絶叫する。娘は「それ丈はたしかにといふのは、たしかなのはそれ丈なんでせう。」と冷やかに云ふ。そこで、母は自分の過去を語り、誰が好きでこんな商賣をしよう、目前饑餓と虚遇は迫つてゐる。才ありて金なく身分なき女の爲めに唯一の活路はたゞ、この一方に開けてゐる。

る。世間の淑女面を澄してゐる人達でも、やはり金のある男の氣に入つて、これと結婚して、その金を利用するに異りはないではないか。たゞ結婚の式を挙げたと挙げぬ、それ丈では是非曲直を分つのだと云ふ。ギギイは縷々述べ来る母の言葉に衷心から感動して、うつとりその顔をながめながら「お母さん、貴女は實に強い人ね。心底から疑惑も不安も恥辱も感じないんですか。」といふ。「何の恥ぢる者か。私はそんな心にもないお體裁をやるのは嫌ひです。世間が女の爲めにさうした道を開いてゐるのに、別な道のある風をしたところで何になります。」といふ。ギギイは考へ込む。(第三幕)翌日牧師がアドアナの邸。牧師の息子フランクがギギイと相戯れてゐるとクロッフが来て、フランクを追ひやり、ギギイに女房になれと云ふ。ギギイは手強くはれつづける。クロッフは圖圖しく、「いつまでも否だなんて云へるものなら云つて見るがよい。お前の母の商賣に注ぎ込んだ金も、なまやさしい金ぢや無え、お前の高慢ちきな面をする丈の學問をさせた金もどこから出たと思ふ。ブルッセルに二軒、ベルリンに二軒、ウインナに二軒、ブタペストに一軒の店を置き、己が四十萬磅といふ同業に類の無い大資本を下し、お前の母が支配人をやつて經營して行く大會社の収益はみな夫から上る金だ。」といふ。ギギイは、「母は非常な貧窮の爲めに理も非もなく、このやうな事業を擇ぶやうになつたのです。けれども貴方は有福な紳士でありながら、三割五分の利潤に迷つて同じ事業をやる。貴方はたゞの悪漢です。社會が未だ貴君を許し、法律も貴方を保護するところを以て見れば、社會も凡べて悪漢です。」と言ひ放つて立去らうとする。クロッフは、憤然これを遮らうとする。娘は「靜かになさい。人が來ます。」といつて鈴を打つと、直ぐフランクは銃を擬して現はれる。クロッフは思々しきやうに、暫らく睨んでゐたが、「おい、行く前に俺はお前達にいふことがある。フランクさんお前さんには腹變りの姉、牧師サムエル、ガアドアナの長女のギギイさん、又ギギイさんには腹變ひの弟のフランク、まあ仲好くしたまへ。」と言捨て、門外に姿は見えなくなる。(第四幕)ロンドンのとある事務所。ギギイ田舎へとび出して茲に二日。昂奮した氣も落ち著き、精力も回復して日々孜々と事務を執つてゐる。こゝへ、フランクが来て、ギギイと新に姉弟の交を結ぶ。次いでアレットもイタリイへの出立の途中に立寄つて、又もギギイをイタリイへ伴れて行つて、美とロオマンズに飽かせたいなどといふ。ギギイは冷然「もう戀の若い夢と人生の美

とロオマンズ、この二つの話だけは止めて頂きませう。私にはもう幻影はありません。私は永久に獨身永久に非ロオマンチックな女だと思召して下さい。」語るうちにギギイはなほアレットもフランクも、案外自分の母に就いて知ることの淺く、正式の夫を持たない品行の好くない女といふ以上に出ぬ事を發見する。ウオレン夫人の職業——母の職業を表はす思はしい二語は、絶えず耳に轟き舌頭に躍つてゐる。しかも彼女は之れを口にする、とは出來ぬ。彼女は遂に筆を執つて、かの思はしい二語を記して、忽ち之れを破り棄て、顔を蔽つて突伏した。最後にウオレン夫人が、娘の跡を尋ねてやつて来て、熱心に娘を説いて一緒に連れ歸らうとする。彼女は極力富の樂みを説き習俗の偽道德に迷はされて、掛替のならぬ母一人を捨てるといふ。娘は靜かに私も習俗の道德の偽りはよく知つてゐる、境遇に迫られた母の運命に同情する。しかし私は私であくまでも別の途を行きたいといふだけだといふ。母は絶望の太息を吐いて、私はお前を母子の情を思はぬやうなこんな高慢な偏屈者にしようと思つて教育を受けさせたのぢやない。自分の教育が不完全で苦しんだから、お前には同じ苦みをさせまいと思つてやつたのだ。お前は私から大學の教育を盗んだのだ、私は絶えず善良な女になりたいと思つてゐた。で、私は正道の仕事をやつて見た。それなのに却つて虐待をうけ、私は遂に正道を咀ふやうになつた。私は善良な母だつた、で、自分の娘は善良な女に仕立てた爲めに娘は却つて母を癡病病みのやうに厭つて反き去るのだ。今日からは神に誓つて私は悪事をする、悪事ばかりをする、そして榮えるといふ。娘は「私は貴女のやうにこつちの道を辿りながら別な道を信じてゐるやうな事はしません。貴女は底を叩けば、依然習俗の婦人です。だから茲で別れようといふです。私のいふ事は正しいでせう。」母、「さうかも知れない。誰も彼も正しい事／＼つてするやうになつては世は未だ、では歸りませうよ。」夫人は握手もせずして去つた。ギギイはいそ／＼と簿記臺に向つた。これは「面白く無い劇」の一つで喜劇といふのでは無いが、喜劇的分子を多量に含んでゐる。所謂「市より市に叫ぶ賣淫婦の聲」に代つて社會制度の不備を鳴らしたもので、痛烈なる皮肉と諷刺とは、よく彼の特色を發揮してゐる。そのギギイの態度には、シヨオの積極的な精神が力強く表はれてゐるではな

しか。

他、ピアサア・ピネロ、ガルスワアジイ等も、劇作家として重きを爲してゐる。ピネロ（1855—）は俳優として立つて居たが、その後専ら劇作家となり、はじめは通俗的の喜劇作者たるに過ぎなかつたが、後イブセンの影響を受けて、真面目な悲劇の方へ轉じ、ピネロ自身の一生の轉期を成したと同時に、英吉利劇壇の一轉期を作つた。其代表作「二度目のタンカレ夫人」は、實に英吉利劇壇に新紀元を造つたものと云はれる。しかし、今はショオなどより、一時代前に屬するものと見られてゐる、其他アアサア・ジョンスは喜劇作者として名高く、ガルスワアジイ、バアカア等も新進劇作家として聞えてゐる。

（六）評論壇の一瞥

カアライル さて、以上を以て、創作界の方の概勢を説き得た。翻つて、評論界の方を一瞥せねばならない。文藝批評の發達は十九世紀英吉利文壇の特殊の現象で、近代文學の創作の方ではあまり振はない英吉利も、批評家としては多くの名高い人々を出した。詩人として知られたワアズワアス、コオルリッチの二人は、批評家として重要な地位を占めてゐる。従來その標準を形式の上に置いたところに擬古主義的批評に對して、内容本位の浪漫主義的批評を創めたのは、實に此の二人であつた。十九世紀の後半に至つては、カアライルとマッシュウ・アアノルドとの二大批評家が出た。カアライル（1775—1831）は、藝術批評家といふ

よりも寧ろ文明批評家と稱す可き人で、「人生の爲の藝術派」の見地から文藝を批評した。即ち此實人生の中に批評の標準を求めた。其名著「英雄崇拜論」中に於て、ダンテ、シエクスピイア等を論じ、詩人と豫言者とは同一であるといふ意見を述べてゐる。此實人生に貢獻する所なき文藝は何にもならない、そんな文藝は繩飛び踊り、オペラ踊り、街道流しの音楽と何の選ぶところもない。眞の文藝は一國の文明を指導するところの、一種の宗教であらねばならぬと論じてゐる。其論著としては、「英雄崇拜論」をはじめとして「ゲエテ論」「サアター・レザアタス」等が名高い。

アアノルド カアライルが人生派の見地に立つてゐるのに對し「藝術の爲の藝術派」の見地に立つてゐる批評家は、マッシュウ・アアノルドである。アアノルドは、獨逸のレッシング、佛蘭西のサント・ブウヴと共に、近代の三大批評家と云はるゝ人である。彼は批評の標準を文藝其ものの中に求めた。而して、「世に知られ若くは考へられたる最高のものを知り且つ廣めんとする公平無私の努力——」これが批評であると定義を下してゐる。「その公平無私」といふのは、實人生から超越するといふほどの意味である。「最高のものを知り且つ廣めんとする」といふので、鑑賞的態度も覗はれるし、「知る」といふので、知識的傾向も覗はれる。

アアノルドの知識的傾向に反して、唯「感じ」といふ事をのみ重んじた批評家は、ベエター（1839—94）である。即ち、彼は印象批評の様式をとつた。人生の目的は快樂にありといふ見地から、彼の批評も快樂といふ事を標準としたのである。シエクスピイア研究の泰斗と稱せられるダウデン、文學史家として

ベエター
とシモン
ズ其他

名高いセイントペリイ、北歐文學の紹介者として名高いエドモンド・ゴッス等は現代批評家の重なるもので、「表象派の文學運動」の著者シモンズは、詩人として傑れてゐると共に批評家としても名高い。罵倒を以て有名なチェスタアトン、劇評家のアアチャア、露西亞通の作家ベアリング等も一方に重きを成してゐる。藝術が一般に人生的傾向をとつて來たと同時に、文藝批評も、單なる文藝批評を離れて、人生批評即ち文明批評の傾向にすんで來たのが、最近批評壇の概勢である。これは、決して、英國ばかりでなく、世界の文壇を通じての事で、現に日本の文壇を見ても、さうした傾向が著しい。

(七) 亞米利加の文學

亞米利加文學は近世になつてから英吉利から移住したところの殖民地に發生した文學である。だから大體に於ては英文學の一分派と見て差支ないやうなもの、細かに味つて見ると、稍々異なつた所がある。英文學は何と無く一種の窮屈な型に嵌つてゐる、即ち道德とか古い習慣とかに縛られてゐるが、亞米利加文學には無遠慮に足を投出したやうな、平民的な趣がある。政治上でも民主主義であり、人種から見ても彼等は純粹な英吉利人では無く、佛蘭西、西班牙、獨逸等の人々の血が混り合つてゐるので、亞米利加人の性格は英吉利人のそれよりも遙かに複雑で、一定の型にはまつてゐない。また、殖民地の生活から、彼等の性質は自ら意志的になり、感情が粗大になつてゐる、而して、彼等は其國土に於て何等

のロオマンズをも有つてゐないから、唯現在の活動的物質的で、夢も無ければ憧憬も無い、所謂ヤンキイ氣質は甚だ藝術には縁が遠いものである。

オスカア・ワイルドが、曾て唯美主義を宣傳す可く亞米利加に遊んで、「裝飾美術」について講演した時「亞米利加の家は皆、悪しきさまの意匠、没趣味の裝飾を以て充たされ、加ふるに調子類の如きも、皆粗笨で時代おくれだ。」と罵つた事があるが、實際亞米利加は藝術とは親しみの薄い土地である。少くとも、過去及び現在に於ては亞米利加文學には殆ど見る可きものは無い、亞米利加の文學は未來の發達に俟たねばならない。

(八) 最近文壇の一瞥

亞米利加に文學らしい文學が出來たのは、アアギング (1783—1859) からであらう。彼の名は「スケッチブック」の著者として、英學生の間などに知られてゐる。これは各地旅行中の見聞を記した小話集で、アチソンに似た滑稽趣味に富んでゐるが、アチソンよりも、つましやかで、微笑の中に包まれた涙に、ユウモアの味が深い。ユウモアは、亞米利加文學の特色の一つである。中にも、「リップ・ブレン・キンクル」「スライピイ・ホロオ」の二小話は、ハドソン河畔に縹渺たる神話傳説の夢幻境を作り出して、殺伐な、がさ／＼した新開の亞米利加に、一味の浪漫的のうるほひをつけたものである。散文の方のアアギングに

對して、詩壇の創始者とも云ふ可きはブライアント(1794—1878)で、ワアズワース流の人生觀を歌うた。其代表作は「サナトブシス」の一篇である。

アラン・ポオ

亞米利加の文學者の中で、歐羅巴文壇にまで影響を及ぼしたものは、哲學者エマアスンを除けば、ひとり、エドガアアラン・ポオ(1809—49)があるのみである。ポオは、實に近代主義者の第一人として、世界の文壇においても、最も重要な地位を有してゐる詩人である。彼の作には、寫實派と浪漫派とが巧に結合はされてゐる。一方には非常に細かな鋭い科學的な解剖力をもつてゐると同時に、一方では、神祕的超自然的な境に奥深くはひつて行く空想力が豊かであつた。而して一方には話の筋を巧みに運んで行く技倆を有してゐたが、其目的とする所は全體の上に専ら暗い凄い一種の情調を醸し出すにあつた、即ち幾多の暗示的な叙述を重ねて行く其一筆一畫がやがて一種の氣分を漲らして、其氣分の中に、讀者を溺らす——といふのが、彼の作風である。其傑作としては、散文に「黄金蟲」「黒猫」「赤き死の假面」等があり詩に「鴉」「警鈴」等がある。「鴉」は其愛妻を失うた悲みを象徴的に叙したもので、最も有名なものである。彼の詩は音樂的要素に富んでゐて、その微妙な調子が人を魅する。例へば、或る一定の間隔を隔て、同一の句を繰返したり、前の句を少しく變へて反覆したりなどは其技巧の重なるもので、「警鈴」の如きは、音調のみの詩と云うて差支が無い。藝術家の最高天職は快樂を與へるにある、詩は韻語を以て快いものを作り出せば足りるといふのが彼の藝術觀で、即ち彼は純粹の藝術派である。以上の諸點から、

彼の文藝のデカダンの文藝である事が判らう。實際彼自身は一個模範的のデカダンであつた、我儘で意志が弱く飲酒と病氣との暗い生涯を送り、遂に居酒屋でのたれ死をした彼の實生活は、近代のデカダンの精神を具體したものでなければならぬ、もとより、多分に浪漫的な空想的な分子はあるが、其敏感と悲痛とによつて彩られた神祕的象徴的な作風は、明かに近代デカダンの文藝の先驅をなしたものである。彼は本國に認められる前にまづ歐羅巴の文壇に認められた。「大鴉」は英吉利に飛び渡つて、ラファエロ前派の詩人を動かし、ロセツチの如きは、これが向うを張つて、「昇天聖女」の一篇を作つたほどである。佛蘭西の象徴派の詩人も彼によつて動かされ、散文はポオドレエルによつて、詩はマラルメによつてしきりに翻譯せられ、象徴派運動に刺戟を與へた事頗る多い、或る批評家はポオを稱して、「佛蘭西象徴派中に於て、彼が本國では持たなかつた王座と家族的肱掛椅子とを與へられた者」と云つた。

エマアス

エマアスン(1803—89)は世に「コンコオドの哲人」と稱せられる。偏屈に凝り固まつてゐたニューウイングランドの清教徒は、情感を解放して廣く外國から來る新思想を受け入れて、文藝の方面にも新しい運動を起した、其新運動の中心となつたのがエマアスン及び詩人ロングフェロオ等である。エマアスンは藝術家ではない、彼の作品としては、唯、哲學的な詩と斷片的の小論文としか無い、彼の思想は其文章と共に甚だ臙臙としてゐるが、要するに、ワアズワース流の自然觀にもとづいて、個人の發展と向上とを宇宙の目的であるとするのが其根本思想で、彼は常に自然を愛慕し、靈界の美に憧れ、殆んど人間の

悲喜哀歡に遠ざかつて、唯冥想と靜思とを事とした。エマアスンに感化されて、其下にあつまつた一派の人々を「超絶派」と呼び、精神的神秘的の傾向に深入りして行つた。此派の中の一異彩はソロオ (1811—18) である。彼は人間が自由獨立ならんには、一切の慾望を極度迄節しなければならぬと説き、コンコオドの近傍のワルデンの池の畔に自ら小屋を作つて其中に棲み、世を避けて自然と親しんだ。其著に「森林生活」がある。森の詩人として彼の名は世に高い。

亞米利加の文學者の中で、歐羅巴の一般社會に迎へられた人は、散文ではアアギング、詩ではロングフェロオ (18—188) であらう。此二人の作には亞米利加臭いところがない、亞米利加人として見るよりも、歐羅巴人として見る方が適當なくらゐ、歐羅巴かぶれがしてゐるといふことが其理由であらう。ロングフェロオの詩は、飽迄も平淡で、其中に幽婉の情味を湛へてゐる。雄大の想とか創新の才とかを此詩人に求める人は屹度失望するであらうが、その溫柔な美しい詩風は、平民詩人として、一般の人々に大なる慰藉を與へた。其長詩「エヴァンゼリン」は、エヴァンゼリンといふ一人の婦人が、あらゆる艱苦を凌いで、熱烈なる愛の一念を貫く始終を歌つたものである。

エマアスンは説き、ロングフェロオは歌うた。いづれもニュウイングランドの清教徒の眞精神を發揮しようとしたのである。ホオソン (18—186) は更に之を描いた。彼の作には短篇が多く、極めて短い一場の事件の裡に人生の神祕な運命といふやうな趣を見せたものが多い。長篇には「緋文字」以下四篇の作

フロング
フェロオ

ホオソン

がある。いづれも性格とか事象とかを描く事を主眼としないで専ら人生を内部より觀察し、或心理上の事實、或る道徳上の問題を説明せんが爲に人物を設けたり事件を作爲するといふ行き方のもので、寫實の中に一種の寓意を交へ、それによつて人生の奥に横はる神祕を暗示しようとしたものである。

「吾歌ふ所には矛盾がある。而も之れ、偶々然として其中に雑多の矛盾を藏する十九世紀の合衆國を忠實に寫したものに過ぎ無い。」かういふ主張のもとに、亞米利加の國民精神を歌うた詩人にホイットマン (1819—92) がある。民主主義の根本義たる自由平等、四海同胞の大理想、これが彼の歌はんとしたところである。その詩は、頗る破格なもので、詩といふよりも寧ろ散文と云ふ可きもの、其價值に就いては區々の評がある。その後嗣者にトラウベル (1858—1919) がある。其他、シラア (1841—1913) は、純眞粗朴な作風を以て知られてゐる。

亞米利加文學の最も著しい特徴は前にも一寸述べた通り、滑稽趣味に富んでゐるといふ點にある。勿論この滑稽趣味は單に亞米利加の文學の特徴たるに止まらずして、廣く其國民性の要素を成してゐる。アアギングの外、ホホムズ、ロオエル等も滑稽小説の作家として知られてゐるが、しかし是等の作家の滑稽は、ドイツケンス、サッカレエ流の英國種であつて、決して單純な滑稽ではなく、笑の中に涙があると云ふやうな性質のものである。しかし、最近の亞米利加文壇に於ける滑稽は、ほんたうの滑稽一點張で誇張とか不意打とか語呂合せとか混ぜツ返しとかを其要素としたものである。で、この種の滑稽作家の

ホイット
マン

マアクト
ウエント

うちで、最も傑れてゐるものは、マアクトウエン (1835—) である。(本名はクレメンズといふ) 其作物には「蛙の踊り」「赤毛布」等の作がある。彼は非常に鋭い観察眼を持てゐて、あらさがしに妙を得てゐて、偽君子や偽善者に痛快な嘲笑を浴せかけてゐるところ、諷刺家とも見られるが、しかし其本頭は、矢張人を笑はせる滑稽作家たるにある。

其他の諸作家についても、まだ擧げねばならぬ多くの人があるが、こゝには其餘裕の無いのを憾みとする。唯南北戦争以後即ち一八六一年以後、亞米利加の文壇にも新傾向が現れて、寫實小説が盛になり、ブレット・ハート、ハウエルズ等の寫實主義の作家が輩出した事は、前に述べた滑稽文學が特に盛になつた事と共に最近亞米利加文壇の趨勢として特記せねばならない。「アングルトムスケピン」の一作を以て奴隷廢止運動に促成したスタウ夫人 (1811—89) の名も忘れてはならぬ。ヘンリー・ジェームスは英國に歸化して、英國作家の列に入つてゐる。

其他の諸作家

第二十講

世界文壇の現勢

(一) 英米文壇の現状	四一八
(二) 愛蘭文學の一斑	四二一
(三) 社會劇の作家	四二四
(四) 米國文壇の概観	四二五
(五) 露西亞文壇の現状	四二六
(六) スカンヂナヴィヤ文學の新聲	四二八
(七) 獨逸の表現主義	四三一
(八) 佛蘭西文學の二潮流	四三七
(九) 南歐の新聲イバネツ	四四五
(十) 新理想主義の勃興	四四六

(一) 英米文壇の現状

現下世界
文壇の現

第六講以下に於て、世界の近代文學について、國別に順次之を説き來つたが、説き漏らしたところも尠なからず、現下の狀勢は未だ語つて詳かならぬものがある。こゝに講を改めて、現下世界文壇の情況について一わたり説くと共に、上來説き來つたところについて、足らざるを補ふ事としよう。

先づ英吉利の文壇から説く事とする。我が文壇に於ける英文學の影響は、我が文壇に自然主義が起る前にあつては、頗る大なるものがあつた。明治新文明の基礎をなした福澤諭吉の所謂實學が、英國のミルから來てゐるやうに、文藝の方面でも、新時代の曉鐘と云はるゝ坪内逍遙の「小説神髓」は、英國の美學乃至修辭學から原型を得てゐる。また、所謂政治小説として先づ我が文壇に移植されたものも、リットン、スコット、ジスレリイ等、主として英國の作家のものであつた。が、明治三十年代の末、自然主義起るに及んで、英米の作家は俄かに顧みられなくなつた。それにはいろいろの理由がある。しかし、大陸の他文學無しといふやうな考へ方が甚だ早計であつた事は争はれない。最近に至り、英文學の活躍と共に、我が文壇にも英文學が連りに迎へらるゝに至つたのは、正に當然の事と云はねばならない。

ヘアデイ、メレディス、ジェームスの三尊について、現下英國の中堅をなす人に、コンラッド、ウエエルス、アーノルド・ペンネット等がある。ジョセフ・コンラッド(1857—)は、波蘭の生れで、英國人ではない

我邦の文
學と英國コンラ
ッド

が、英語を以てその創作を發表したので、英國文壇の人と認められてゐる。その船員として送つた長い間の海上生活から材を取つた作を以て海洋文學者の名を恣にしてゐる。代表作としては、「アルメヤアの愚行」「青春」等の作がある。「わが人生觀は、わが思想感情を誠實に表現せし諸著作に悉す。されど、教理を立て、自分の用に供し、世間への指導に宛てんとせし事なし。勇氣と眞理と誠實と自己抑制と古代人の理想に對する讃仰とを尊敬すれども、世間並に、些末の徳をも立て得ざりし事を殘念に存じ居り候。」とは、彼が、我が國の某教授に寄せた手紙の一節であるが、以て、その態度、作風の一斑を窺ふに足るであらう。その作風は、フロオベル、モオパスサン等に影響されたといふ丈に、客觀的寫實的であるが、しかし、作者の主觀と熱情とは、その作品の底に、深く而して強く脈打つてゐる。心理描寫の精と自然描寫の妙とを併せ得て、その文體の清新雄健、また無類と稱せられる。

エチ・ジイ・ウエエルス(1866—)は、一風代つた作家で、我邦には所謂科學小説を以て聞えてゐる。彼は、科學に、文藝に、宗教に、教育に、あらゆる方面に一家の見識を有し、それ等のすべてをその作の中にとりこんでゐる。その作は、大體科學的ロオマンスト、社會的小説、寫實小説の三つに分たれる。作中有名なものは、獨逸式の規則づくめな教育に對する峻烈な批評を示した「ジョンとピイタア」の外、「彗星の日に」等である。「彗星の日に」は、富者の跋扈は、やがて富國の跋扈となり、貧富の國際的兩階級が反目し合つてゐる時に忽然として一彗星が現れて地球に觸れ、そのため全人類が失神してしまつたが、

ウエ
エル
ス

アーノルド・ベンネットその他

眼醒めて見ると、争闘も反目もない平和の世界になつてゐたといふやうな筋で、彼は、此の作に於て、階級争闘、労働資本の問題を取扱つてゐるものである。以て、その作風の一斑を窺ふに足るであらう。

その他アーノルド・ベンネット(1884—)は、頗る多産の作家で、その郷里なるスタッフォードシャーの陶器製造地の生活を材とした作を以て名を成した。寫實的の作風である、ジヨオジムウアについては既に説いた。コナンドイル(1859—)は、探偵小説「シャアロック・ホームズ」を以て名高い、探偵小説にかけては、何と云つても現代の第一人者であらう。ホール・ケエン(1863—)は、通俗小説家として知られ、ジエロームクラブカ・ジエローム(1859—)は、滑稽味に富んだ作風を以て喝采を博してゐる。ギッシン(1857—1903)は、「新貧乏文士街」に於て、貧乏文士の悲惨なる生活を語つてゐるが、それは、彼自身の實際と見ていい。一生を不遇に終つた作家で、その作は、自然主義的傾向を有し、ディッケンスの流れを汲んだところがあり、一種の宿命觀を寓して、陰鬱な氣分を流してゐる。その絶筆なる「ヘンリー・ライクロフトの手記」といふ隨筆は、隨筆文學の上乗として、一般に愛讀せられてゐる。戯曲に小説に詩に、ゆくところとして可ならざるなき人に、ジョン・メクスフィールド(—)がある。戯曲には描寫の深刻と地方色の鮮明とを以て聞える「ナン」の悲劇の作がある。その詩も、象徴や神祕を離れた現實的社會的傾向のものである。なほその他、エデン・フィルポツツ(1862—)モリス・ヒュウレット(1831—)アンソニー・ホープ(1863—)ヒュウ・ウォルポール(1834—)ギルバート・キヤナン(1834—)等の名を數へる事が出来る。

(二) 愛蘭文學の一斑

愛蘭文學

愛蘭文學が、英文學の中でも一個特別な風格を有してゐる事は既に説いた。ワイルド、シヨオ等の藝術についても、既にその大體を説いたから、こゝに繰返さない。ワイルドやシヨオは愛蘭出ではあるが、所謂愛蘭文學の特色を最も力強く示したのは、シング、イエーツ等である。傳説的な、夢想的な、神祕的な愛蘭の郷土色は、これ等の作家の作に最も鮮かに示されてゐる。

イエーツ

イエーツ(1865—)は、愛蘭文學運動の旗頭で、一代の大詩人であるが、中頃から詩を捨て、劇に走り、愛蘭劇場を創立した。神祕的な、空想的な、而して優婉な詩句に富んだ彼の詩に對して、戯曲の方は多少遜色があると云はるゝ。詩には「葦に戦ぐ風等の集があり、劇には、「何物もなき郷」「デアドラ姫」等の作がある。評論「善惡の觀念」も亦聞えてゐる。

シング

イエーツと共に、愛蘭文學の中堅をなす作家に、シング(1871—1909)がある。シングは戯曲には「谷の蔭」「海への騎手」「聖者の泉」「西の國のいたづらもの」等があるが、何れも愛蘭の生活に材をとつて、その地方色を鮮かに出したもので、憂鬱で、空想的で、憧憬的で、よく自然の核心にまで穿ち入つて、そこに美を見るといふやうなケルト人の特質を最も強くその中に活かしてゐる。「舞臺には眞實がなければならぬ、夫と同時に歡喜がなければならぬ。」とは、彼の創作のモットオで、彼の作は、よく此の語を裏附

けてゐる。次に、シングの作風を示す爲めに、その作「海への騎手」の梗概を示す事とする。

「海への騎手」梗概——「幕物。舞臺は、アイルランド西方沖合の或島の漁夫の家である。老婆モーリヤは、長男のマイケルを海に奪はれて、今は、息子のパートリーと娘のカスリーンと三人で淋しく暮らしてゐる。マイケルの死骸は未だ上がらない。若い娘のノーラが、濱へ打ち上げられてあつたシャツと、飾なしの靴下とを、多分マイケルの遺品だらうといふので持つて来る。カスリーンは、それを見て、母が悲嘆を繰返すであらう事を心配して、これ等の品をそつと屋根裏の泥炭倉に隠して了ふ。ところが、一人残された息子のパートリーは、今日馬を引いて、ガルウエーの馬市に行くといふ。途中の海が危険だからと云つて、母親は止めるが、パートリーは肯かない。「海へ行くのは、若い男の生命だもの、年寄が一つことをくり返しくいくら云つたつてきくものではないさ。」とカスリーンが云ふ。パートリーは出かけて行く。「あゝ、とうとう行つて了つた。わたしはもう二度とあの子には逢へないだらう。今行つてしまへば今日、夜になるとわたしはもう此の世の中に、一人も男の子といふものを持たない人間になるんだ。」と嘆く。そして、パートリーが忘れて行つた辨當のカステラを持つて、パートリーの後を追うて行く。あとで、ノーラとカスリーンとは、マイケルの遺品を検べて見て、それがたしかにマイケルのに違ひ無い事を知つて泣く。そこへモーリヤが裏心した様な様子で歸つて来る。どうしたのかといふと、モーリヤは「恐ろしい事を見た。」といふ。パートリーに、そのカステラを渡し、パートリーの爲めに祈りを上げようとして、パートリーが皆と一緒に通つて行く筈の噴き井戸の傍に行つて待つてゐると、パートリーがやつて来た。パートリーは赤い馬に乗つてゐたが、うしろに鼠色の小馬をつれて居た。ふと見ると、その鼠色の小馬にはマイケルが乗つてゐた。さう語つて、モーリヤは、「今日で愈々私達は滅ぼされた。」と云つて泣く。そして、「白木の棺をこしらへさせて呉れ。あの子たちが死んだあとで、わたしはもう生きてはゐないだらうから。わたしには夫があつた、夫の父親もあつた。それから六人の男の子供が此の家にあつた、六人とも立派な男だつた、これを生む時には随分苦勞をしてやつと世の中へ出したのが、それが六人とも揃つて死んで了つた——。」と述懐する。

この中、パートリーが死骸になつて歸つて来る。鼠色の小馬がぶつかつて、パートリーを海に落したのだといふ。モーリヤは、「これでもう皆行つてしまつた。もう海は私に向つて何も爲る事が無くなつた。」といふ。そして「けれど今はわたしは大きな安息を持つことになつたのだよ。それはたしかにその時になつたと思ふのだよ。今こそわたしは大きな安息を持つのだよ。」と云つて、十字を切つて、祈禱を唱へながら跪く。而して、マイケルのシャツをパートリーの屍骸の上にかぶせて云ふ。「マイケルは北の海の果で、全能の神様のおめぐみで、北海の果に清い墓場を持つことになつた。パートリーは白木で立派な棺を拵へて、墓穴はぜひ深くしてやりませう。今となつてそれより外にわたしは何を望む事が出来よう。どんな人だつていつまでも生きてゐられるものではない、わたしたちは満足してゐなければならぬのだよ。」

此の戯曲に現はれた宿命観は、明かに愛蘭的のものであり、又、シングの思想を最もよく語るものである。シングは三十八歳を以て世を去つたがその六つの戯曲によつて不朽の名を残した。

エー・イー
1 其の他

愛蘭詩人としてエーイツと並稱せられる人に、エー・イー(1867——)がある。エー・イーは雅號で、ジョージ・ラッセルがその本名である。詩人としての外、劇作家としても聞え、また批評家としても重きをなしてゐる。同じく愛蘭派の戯曲家で、エーイツを助けて此の派の運動に與つて最も功のあつた闊秀作家に、グレゴリー夫人(1852——)がある。「ハイヤシンス・ハルヴェ」の「噂の擴がり」など、ユーモラスな輕妙な作がある。その他、愛蘭の劇作家を擧げると、ダンセンエイ(1878——)がゐる。その作に「山の神々」燦めく門」といふ象徴的な戯曲がある。また、閑雅に端正な筆で書かれた神話的な物語も廣く愛讀せられてゐる。「收獲」の作者ロビンソン(1866——)、「長男の權利」の作者マレイ(1873——)、「なまけ者」の作者メイ

ン(1873——)、「異宗結婚」の作者エアヴィン(1883——)、「心の國」の作者マーチン(1859——)等を擧げることが出来る。

(三) 社會劇の作家

パアナアド・ショオについては、既に前に説いたが、ショオに次いで、英國現下の劇壇に振つてゐるのはガルスワージー(1867——)である。彼は、人道主義を標榜して、社會問題を取扱ふ作家で、佛蘭西のブリュートと同じく、その作に、人道的に社會を改善しようとする教訓的の意味を含ませてゐる。その作頗る多いが、労働爭議を取扱つた「争闘」、裁判制度監獄制度を批評した「正義」、慈善事業を論じた「お人好し」の外、「銀の筐」「長男」「群衆」等の作がある。藝術味に於ては缺くところがあるが、その道德的含蓄、倫理的内容に於ては、慥かに、一世を教ふるに足るものがある。「正義」の如き、トルストイの「復活」と呼應するもので、その主題は、社會が裁判制度に随つて個人を罰する事は果して正しいかどうか？といふにある。ルスと云ふ女が良人に虐待されてゐるのを見兼ねて、その同情からやがて戀人となつた辯護士の書記のファルダアは、駈落の金を得る爲めに偽手形を書く。が、結局、發覺して投獄される。ファルダアは有夫姦と、手形の偽造との二重の大罪を犯しはしたが、もと極めて弱々しい善良な男であり、ルス亦必ずしも不貞の女ではない。唯、その境遇に強ひられて、止むなく罪を犯したまでで

ガルスワ
ー
ジイ

ある。かういふ罪人を、本當の罪人と同等に取扱ふのは果して正しいかどうか？そこにこの戯曲の狙ひ所がある。而して、英國ではこの劇が刺戟となつて、監獄の規則が改正せられたといふ事である。ガルスワージーはまた、小説にも筆を染め、「島のパリサイ」「闇の花」等の作がある。

バアカア
その他

バアカア(1877——)もまた、ガルスワージーと同じく、イブセンの影響によつて起つた社會劇の作家で、ガルスワージーと並稱されてゐる。最初は詩的なロマンチックな作風を見せてゐたが、今や、イブセン風の、理智的な現實的な問題的な作を成してゐる。「ヴォイセイ家の家督」「マドラスの家」等の作がある。それからハンキン(1869—1906)も亦、同じ系統の戯曲家で、「放蕩息子の歸宅」といふ親子關係を主題とした作で有名である。非常に傑れた舞臺技巧の所有者であつた。

(四) 米國文壇の概観

米國の文壇は、相變らず不振といはねばならない。中で、特筆に價するのは、ジャック・ロンドン(1867—1916)である。彼は身を労働者から起して、社會主義を奉ずるの點など、マキシム・ゴルキイを思はせる作家である。「野の呼聲」「ホワイト・フング」等の作が最も聞えてゐる。粗野な、力強い、活々とした作風の所有者である。

その他、短篇作家として、その輕妙な作風を謳はるゝ人に、オー・ヘンリー(1862—1912)がある。オー

ジャック・
ロンドン

オリ・ヘ
ンリイ
その他

ヘンリイは雅號で、ウイリアム・シドニー・ポーターといふのがその本名である。奇警の觀察に富んだ、機智縱横とでも評す可き作風の小話的短篇に、獨特の境地を拓いてゐる。「運命の道」「四百萬人」「都會の聲」等の作がある。ハウエル(1882—)は、既に過去の人であり、ケーブル(1844—)ウイスタア(1869—)等も、さして特筆す可きものを見せてゐない。アサートン夫人(1859—)は、題材の豊富を以て知られてゐる。同じく閨秀作家では、マリオン・クレイグ・ウエントウオス(1872—)が、「戦時の花嫁」「花屋」等の問題劇の作家として名を成してゐる。その外、ダグラス・ウィキン(1877—)アレン(1849—)シンクレイヤ(1878—)チャーチル(1871—)等の名も記憶しておく必要がある。

(五) 露西亞文壇の現状

歐洲大戰の結果として、舊い露西亞は崩壊した。勞農政府の治下に於ける新しい露西亞の文壇は唯、混沌としてゐる。著名の文學者の多くは國外に流浪し、然らざるも創作の筆を收めて實際問題に没頭してゐる。新しき露西亞には、未だ藝術を顧る餘裕が無いのである。たゞ詩人ブレイブニコフ等の唱へてゐる未來派藝術が、プロレタリアートの藝術として採用せられてゐるが、これも未だ眞價を問ふまでに至つてゐない。現下の露西亞文學は混沌として捕捉す可からず、従つて特に説く程の事も無いが、こゝには前に説き漏らした作家について、すこしく説くに止めて置く。

現下の露
西亞文壇

チリ
コフ、
ウエ
レサ
ーエ
フ

現在、勞農露西亞の文教の衝に當つて、殆どその文壇を執つてゐるかの如きは、ゴリキイである。ゴリキイについて露西亞現代文學の大名たるはアンドレエフ、クウプリンである。が、こゝには是等の作家と雁行する者に、チリコフ、ウエレサーエフ等がある事を忘れてはならぬ。チリコフ(1864—)は、好んで田園の生活を描き、殊に心理描寫に長け、時に諷刺と滑稽を交へたところ、一寸チエホフの面影がある。しかも一面、マルクス主義を奉じ、好んで社會問題をとり扱つてゐる。その作は、短篇集「思ひ出の花」、戯曲「マリア・イワーノヴナ」等があり、歐洲大戰から材を得た「戦争の反響」と題する短篇集がある。チリコフと傾向を同じうする作家にウエレサーエフ(1867—)がある。長篇「一醫師の記録」は、彼自身醫師であつた経験をさながらに描いて、醫師の暗面を暴露すると共に、貧民に對する愛の底流を感じしめる作である。チリコフでもウエレサーエフでも、チエホフの描いた幻滅時代から、次の個人主義的覺醒時代、即ちゴリキイの時への過渡期に立つ作家で、時代的に見れば、チエホフの後、ゴリキイの前にある作家であるが、我が邦の文壇には、あまりその名を知られてゐない。

ゴリキイについて寫實主義の脈を追ふ作家として、クウプリン、アルツイバアセフについては既に説いた。アルツイバアセフに似て、性慾描寫にすぐれた作家にカアメンスキイ(1879—)がある。新寫實主義を標榜して立つたアレクセイ・トルストイ(—)がある。ラザレフスキイ(1872—)は、婦人の心理を描くにすぐれてゐる。アンドレエフと共に、象徴的神祕的傾向をとつた作家バリモント、ソログ

その他
の作家

ウプについては前に既に述べたが、なほ、此の系統と目す可き人に詩人ブリュートフ(Brütow)があり、ザイツェフ(Zeiss)がある。ザイツェフはその作、小説の形式はとつてゐるが、實質は散文詩と目す可きもの多く、死生、老幼、人獣の差を没して、人生を全體としてその運命を描くといふやうな作風で、憂鬱な厭世的な氣分に富んでゐる。「静かな曙」「客」「姉」等の短篇を以て知られてゐる。イワン・ブウニン(1870—)は、叙景詩人として聞え、小説の作もまた少なくない。その他、レーミゾフ、テレシヨフ、ドイモフ等なほ説く可き人は澤山あるが、こゝにはその餘裕がない。最近に革命運動を描き、革命家の心理を描いた「蒼白い馬」といふ日記體の小説を以て知られたロープシンの名も記憶に止めて置く必要がある。ロープシンは、ケレンスキイ内閣當時の内務大臣であつたサヴェチニコフの變名である。

(六) スカンヂナヴィヤ文學の新聲

晩近、諾威文學に一新生面を拓いた作家、クヌウト・ハムズン(1860—)は、現代世界文壇の一巨星である。貧しい家に生れて、具さに人生の苦楚を嘗めた人で、青年時代には米大陸に放浪し、電車の車掌にまでおちぶれたことがある。その處女作「飢餓」は、クリスチアニアの一貧困文士の飢餓の苦みと、その爲めに醸された狂的氣分を描いたもので、悲痛を極め深刻を極めたものである。その他、政治界の裏面を描いた「編輯人リュンゲ」、文學者及び商人社會を取扱つた「浅い土」等の外、最近、「大地の成長」と

クヌウト・ハムズン

いふ大作を公にして、世界的大作家の名を確立した。その作風に、寫實的であるが、頗る熱に富み、殊に心理描寫に傑れて、そのうちによく作者の主觀を活かしてゐる。現代文明に對する峻烈な批評はその作品にも見られるが、同時に北歐作家に共通な、一種神祕的な氛圍氣を帯びて、嚴正な寫實の中に浪漫的な趣を見せてゐる。次に、「浅い土」の梗概を示さう。

「浅い土」梗概——諾威の首都クリスチアニアに、二人の若い實業家があつた。一人はアンドレアス・テイデマン、一人はオーレ・ヘンリックセン、二人は同じ學校に學んで、社會へ出てからも、お互に扶け合つて來てゐる親友である。テイデマンの細君のハンカは、夫が、事業にばかり没頭してゐて、更に自分を顧みて呉れないのを物足りなく思ひ、次第に、夫に對する愛情をなくして了ふ。そして、夫婦とは名ばかり、夫とは全く離れた心持で、每晚のやうに酒場に入りしてゐる。その酒場には、常に紳士、淑女、藝術家、俳優、新聞記者といふ連中が集まつて、歡語と哄笑とに夜を徹するといふ有様。男女の交際も頗る恣で、情夫情婦の争奪が公然と行はれるといふ風である。ハンカは、その仲間にはひつてゐるうちに、女たらしの詩人イルエンスと戀仲になつて、夫のテイデマンの儲けた金を湯水の如く使つて、イルエンスに入れあげる。一方のヘンリックセンは、事業上の手違ひから窮境に陥つたテイデマンに一時自分の全財産を融通して、これを救ひ、その報償としてのテイデマンの助力によつて大儲けをし、同時にオーゴットといふ愛らしい娘を許嫁として迎へた。が、オーゴットといふ娘の心にも、實業家のヘンリックセンでは物足りない感じが起る時が來た。それに乘じたイルエンスは、とうとうこの初な正直な處女を誘惑してとりこにして了ふ。そこで、オーゴットは、自分の夫の親友の細君ハンカと、一人の男を争ふ位置に置かれた。オーゴットは、深い自責を感じながらも、ぐいぐいとイルエンスの方に引きつけられて行く心をどうする事も出来ない。一方、ハンカは、テイデマンから離別されて、解き放たれたものに喜びを以てイルエンスの許に走つたが、その時は、ハンカはもうオーゴットの爲めに見かへられてゐたのである。すつかりイルエンスに魅せ

られて了つたオーゴットは、婚約の指環をヘンリックセンに返して關係を絶ち、且つ名義の書換の濟んでおかないのをいふ事にして、ヘンリックセンの財産の一部をイルエンスと共に貰ひ果し、墮落のどん底に沈倫する。ヘンリックセンは、これを見て、オーゴットの遂に救ひ難きを知り、絶望の餘りヒストルで自殺して了ふ。一方、前非を悔いたハンカはよく三年間の試練に堪へて、冥人ティエマンから和解を得る。

「大地の成長」は、學問も知識もないイザックといふ漂泊の老人が、ある曠野の一點に辿りついて、そこに居を占めてから、その曠野の上に、小さな社會といふものが出来るまでの事を、精細に描いたもので、苦難を乗り越えて光明に憧れ、悲痛に堪へて生を肯定する彼の精神は、此の作にもよく示されてゐる。ハムズンには、尙ほその他に三十卷以上の、小説、脚本、旅行記、論文、詩等の著述がある。ハムズンは、極めて多角多彩な作家であるから、批評家によつていろいろの見方をされてゐる。或る批評家は、「ハムズンにはチエホフの澄み切つた觀照が見出される」と云ひ、或る批評家は、「ハムズンには、ドストイェフスキイの人道的な情熱とマークトウェインの極めて自然なユウモアとが含まれてゐる。」と云つてゐる。これ等のいづれも眞實である。要するに、ハムズンが、勇敢に人生を肯定して、是を愛し是をよりよくせんとする情熱に於て筆を執る一個の人道主義の作家であるといふ事については、何人も異存は無からうと思ふ。而して、ハムズンと傾向を同じくする諸威の作家に、ヨハン・ポージェルがある。

ヨハン・ポージェル

ヨハン・ポージェル(——)の作として最も聞えてゐるのは、「虚偽の力」といふ一篇である。その外に、「世界の表」新しき王國「生命」等の諸作がある。いづれの作に於ても、作者の人道的な精神と、そ

その他の諸家

れに根ざす社會改造の要求とが力強く脈打つてゐる。その他、スカンヂナヴィヤの作家として、説き漏らした人に、諸威の方に、アネル・ガルボルグ、ハンズ・イ・エーゲル、閨秀作家カミラ・コレット及びアマリエ・スクラム等があり、瑞典の方に、エル・ネルフォン・ハイデンスタム、ベエル・ハルストレム、アドルク・パウエル、マテイルダ・マリリング等があるが、これ等の作家については、こゝに一々説いてゐる餘裕のないのを憾みとする。

(七) 獨逸の表現主義

新古典主義

ホルツ、シュラアフの徹底自然主義が、ハウプトマンを起し、ハウプトマン、ズウデルマン等が戯曲に於て自然主義を代表するに對し、ホフマンスタアル、デエメル等の詩壇は、象徴主義を奉じ、更に小説家の一群は郷土藝術の旗幟の下に集まつた——といふのが、近代獨逸文壇の情勢であつた。ところで、もう一つ、こゝに注目す可きは、パウエル・エルンスト(Engel)等によつて唱へられた新古典主義の運動である。同じく、自然主義に反抗して起つた象徴主義、新浪漫主義運動でも、ホフマンスタアル等のそれとデエメルのそれとは大分違つてゐた。ホフマンスタアルは、思ひ切つて高踏的な貴族主義的な態度を以て、情調本位の藝術を主張したが、デエメルは、さういふ民衆即俗衆といふ風に見くびつて、ひとり高くとまつてゐるやうな態度を斥け、進んで、藝術と民衆乃至文化との交渉に向つて努力しようとした。

シュミット・ボン
その他

この傾向が、更に歩を進めて、一國文化の爲めならば、藝術的要素を犠牲してもかまはぬと説き、外來の自然主義乃至新浪漫主義をしりぞけて、從來閉却してゐた國民的要素を高調し、祖國の傳統なる古典主義に歸らうとするのが、新古典主義の主張なのである。彼等は、自然主義も、新浪漫主義も、皆人は自然の支配の下に活き、自由の意志を有たぬ、といふ思想を根柢とする。それ故、これ等の主義に立つ藝術は、偉大なる藝術たり得ない。偉大なる人物即ち意志の鞏固な人物を描くのでなければ、偉大なる藝術とは云へない。意志の強固な、意志の自由を有する人間が、運命と奮闘するところにこそ偉大さがあるからである——こんな風に新古典主義者は説いた。パウエル・エルンストの作、「ブルンヒルド」それから、同じく此派の大立物なるキルヘルム・フォン・シヨルツ(1874—)の「メローエ」などは、此の派の主張を裏附くるに足る作品である。この新古典主義は、現下、獨逸の文壇、文壇ばかりでなく全思想界を風靡しつゝある表現主義の先驅をなすものと見て差支が無からう。

殆ど、新古典主義者と同じ要求から起つた一派に、シュミット・ボン、オイレンベルヒ等によつて代表さるゝ情熱派ともいふ可きものがある。藝術を、教化に資せんとする此派の態度は、新古典主義に似てゐる。同胞に對する愛を基調とし、無智と惡徳とを征服して、積極的に人類に新しき力を喚起するといふのが、此の派の精神で、その情熱的な作風から此の名を得たのである。ミュミット・ボン(1876—)には、「チオゲネスの誘惑」「街の子」等の作がある。いづれも人道的感情の激しく脈打つてゐる力強い作である。オイレンベルヒ(1769—1821)には、「女の決闘」といふ短篇がある。

さて、大戰後の獨逸に於て、最も眼覺ましい運動を起しつゝある表現主義といふものについて説く可き順序となつた。云ふまでもなく、大戰後の獨逸、現在の獨逸は非常な窮境に陥つて疲弊の極に達してゐる。多額の償金に背を壓しられつゝ、しかも、其日の衣食にさへ困つてゐる。が、かういふじめな生活の中に於て、獨逸國民は精神的思想的の一大飛躍をなしつゝあるのである。この事は一見不思議に感じられるが、よく考へて見れば、決して怪むに足りない。困憊の中に立つ時人はその心を緊張させる。そして慘苦の裡に於て人は痛切に自分を反省する。此の緊張と反省とからは、必ず何かが生れて來なければならぬ。況んや、獨逸には、社會上政治上に於て無前の大革命が行はれた。この大革命は、精神的思想的にも深い影響を齎さすにはゐない。社會上政治上の革命は、やがて精神的思想的の革命を將來せずにはゐない。この大戰の慘敗と慘敗後の艱難な國民生活とに於て、獨逸は何を悟つたか？ それは物質主義の破綻である。歐洲大戰は、これを全世界に教へた。物質主義の上に打ちたてられた科學的文明の頼みがたき事を全世界はこの大戰によつて悟つた。しかもこの覺醒は戰敗國たる獨逸に於て一層痛切なものでなければならぬ。而して、この覺醒に於て、獨逸は、その過去に有した理想主義の文化を追想せざるを得なかつた。云ふまでもなく、獨逸は最も理想主義的の國民で、その理想主義の文化は、獨逸の誇りとするところであつた。この理想主義の文化を追想して、それを再び取り戻さうとする心持が、

表現主義
とは何ぞ

現在の獨逸の心持でなければならぬ。詢に、戦後の獨逸に於ける理想主義的傾向は、頗る著しいものがある。勿論、これは世界一般の傾向で、ひとり獨逸に於てのみ見らるゝものではないが、獨逸に於てこれが一倍強いといふ事は争ふ事が出来無い。而して、表現主義の如きも、かういふところから産まれたものに外ならない。

前に述べた通り、新古典主義一派の主張のうちに、既に、その萌芽を見る事が出来るのだから、表現主義を以て、全く戦後の産物となす事は出来ない。が、表現主義が、現在の如く優勢なものとなつたのは、大戦並びに大戦後の國情から來た刺戟によるものである事は争はれない。さて、表現主義とはいかなるものか？ 次に、先づ、その要點について説いて見るとする。

表現主義も、前述の新古典主義と同じく、自然主義と新浪漫主義とに反抗してゐる。が、新古典主義が全く國民的、傳説主義的なのとは違つて、表現主義は、人道主義的、世界主義的である。而して、新古典主義者と同じく、表現主義者も、自然主義と新浪漫主義とを同種のものと思つて、これを斥けてゐるが、この斥ける理由は、新古典主義者に云はせると、外國文學の模倣だからといふのであるが、表現主義者は、そんな理由で、自然主義と新浪漫主義とを斥けるのではない。表現主義者は、自然主義と新浪漫主義とを、共に、外部から印象をとり入れるところの印象主義の藝術と見て、これを斥けるのである。さういふ消極的な、唯、外部からの印象を受け入れるに止まるやうな藝術を斥けて、積極的に内部から外部へ出てゆかう、即ち印象するのでなく、表現する——といふところに、表現主義の主張があるのである。それで、印象主義に對して、表現主義と稱したのである。表現主義者の態度はあくまでも積極的である。その人生に對する態度は、人生を完全にし、最善なるものを權威にしようとする積極的な努力的な態度である。我々人間の精神は、決して單に外部からの印象を取り入れるだけのものではない。我々人間の精神のうちには、微妙な作用を備へたところの自我を蔵してゐる。そして、外からとり入れたものを、その自我の中の微妙な作用によつて、たとへば鑄物師が金を鑄るやうに溶解する。而して、自我の理想に従つて、新しいものに改造する、その改造したものは、現實とは遙かにちがつたものであり、現實との聯絡は殆ど見出されぬものである。即ち、自然の模倣のあとをとめてゐない。自然は材料はなつてゐるが材料は材料、出来上つたものは出来上つたものである。出来上つたものは、全く新しい創造である。かくの如き創造こそ、表現主義の藝術家の眼ざすところである。一言につくせば、自然を内部にとり入れ、それを理想によつて改鑄するのである。即ち、藝術は至高なる理想の表現である。とするのが、表現主義の主張である。之を要するに、自ら創つた理想の世界を自分のうちに抱きつゝ、この現實の苦惱と對抗する、而して、やがて實際に、この苦惱に充ちた生活を、理想的なものに改造する事を豫想するといふのが、表現主義者の態度であり主張である。

表現主義の作家としては、戯曲の方でワルテル・ハーゼンクレーヴェル。この人には、「息子」「アンチ

ゴネ等の作がある。ハンス・ヨースト。この人には、小説に「冒頭」戯曲に「寂しき人」等の作がある。ラインハルト・ヨハンネス・ゾルゲ。この人には「乞食」といふ作がある。フリッツ・フォン・ウンルウ。「一つの時代」の作がある。ラインハルト・ゲイオリンク。「海戦」第一人等の作がある。エルンスト・バルラハ。「憐れな従兄」等の作がある。オスカア・コニシュカ。「オルフィイスとオイリディケ」の作がある。パウエル・コルフエルト。「誘惑」の作がある。アントン・ギルドニカス。「貧困」「愛」「怒りの日」「カイン」などの作がある。ゲオルグ・カイゼル。「誘惑」「珊瑚」「カレールの市民」「朝から真夜中まで」「ヨーロツバ」「瓦斯」「ユダヤ人と寡婦」等の作がある。

以上の諸作家の中最も頭角を現はしてゐるのは、ゲオルグ・カイゼル（——）である。而して、その代表作とも云ふ可きは、「カレールの市民」で、この作は、單に表現主義の傑作であるばかりでなく、最近獨逸劇壇の一佳作であると云はれてゐる。材料を百年戦争に於ける英軍のカレール市包圍の際の、カレールの市民達の勇敢な献身的行動をとつたものであるが、次にその梗概を掲げておく。

「カレールの市民」梗概——英佛兩國の戦は、佛軍の敗北に歸し、カレール市は英軍の包圍するところとなつた。英軍から使が来て、若しカレール市が、翌朝六人の市民を犠牲として英王の許におくれば、全市民を助けてやるが、さうでなければ、全市を破壊し、港灣を埋めて了ふといふ。そこで、カレール市では市参事會が開かれて、いろ／＼と相談する。軍國主義の代表者なる一士官は、斯くの如き不名誉な條件を忍ぼうよりは、いつその事深く戦死しようといふ。これに對し、人道主義の代表者なる参事會員エステル・シュ・サンヒェルはより高尚な立場から英王の條

ゲオルグ・カイゼル
「カレールの市民」

件を容れようと主張する。カレール市の誇であると共に、世界人類のため必要なこの港灣を保存する爲めには、いかなる犠牲をでも拂はねばならぬとエステル・シュは主張するのである。そして、自分自らその六人の犠牲の一人とならうと申し出る。すると、彼の決心に動かされて、犠牲にならうと申し出る参事會員が七人も現はれた。敵の要求は六人だから七人では一人餘計になる。で、翌朝、定められた場所へ最後に來た者を、犠牲の名譽を擔ふ資格の無いものとして除外しようといふ事をエステル・シュは自ら提議する。さて、いよいよ翌朝、人々は定刻までに定められた場所、寺院の前の市場に集まつて來たが、エステル・シュだけはやつて來ない。一同は、彼の心事を疑ふ。そこへ彼の屍が運ばれて來る。彼は、最後の者として來ずに、最初の犠牲者として、彼等に先んじて自ら死んだのである。この彼の死に勵まされて、他の六人は、従容として敵の陣中に赴かうとする。と、再び英軍から使節が來て、英軍の陣中では昨夜王子が誕生したので、英王は、その祝ひとして、六人の市民を特赦するといふ恩命を傳へる。そこで市参事會員等は、英王がこの町の寺院に感謝の祈禱をさし上げる際、エステル・シュの棺を祭壇の上に安置して、勝利者たる英王を、より大なる征服者たるエステル・シュの前に跪かせたのであつた。

表現主義者のもつ理想主義的、人道主義的傾向は、この梗概を讀んだだけでも十分に窺ひ知る事が出来るであらうと思ふ。

(八) 佛蘭西文學の一潮流

現下佛蘭西の文壇乃至思想界に於て、最も著しい現象は、國家主義的傳統主義的精神の勃興である。大戰の結果として起つた獨逸の表現主義が、世界主義的の傾向を指してゐるに對し、大戰の結果として、佛蘭西の文壇に強調せられたものは、國家主義的、傳統主義的精神であつた。これは、佛蘭西の國民の

大戰後の
佛蘭西文壇

魂の底に深く喰ひ入つてゐるカトリック精神の復活と相俟つもので、大戦によつて緊張した國民的自覺が、再びよみがへつたカトリックの精神と一つになつて、國家主義、傳統主義の強調となつたのである。勿論かういふ傾向は、獨逸の表現主義の然りし如く、戦後の産物ではなくして、戦前から既にあらはれてゐたものである。自然主義が文壇思想界を風靡するに當つて、先づ起つてこれに反抗したのはブリュンチエル（1849—1908）であつた。文藝の進化を説き、文藝に倫理的價值を要求して、自然主義攻撃の急先鋒となつたブリュンチエルは、また、一箇の傳統主義者であつた。彼は、傳統に歸れ、傳統を尊重せよ、近代の佛蘭西人はあまりに古傳統を蔑にし、その貴重な特質を失はうとしてゐると説いた。作家側には、ボオル・プウルジエ、モリス・パレスが、此の主義の把持者であつた。ユイスマンズやアナトール・フランスもまた明かに、此の派の人と云つてよいが、就中、最も活躍してゐるのは、モリス・パレスその人である。

モリス・パレス（1869—）は、普佛戦争の起る十年程前にロオレンに生れた。普佛戦争に於て敗北の結果その郷土なるロオレン州を敵の手に奪はれたといふ事が、パレスの心にいかに根強い愛國主義、國家主義、従つて傳統主義を植ゑつけたかといふ事は想像に餘りある。彼は、最初は、極端な個人主義を主張し、自己禮拜の個人的宗教家とも云ふ可き概があつたが、やがてその自己の人格の因つて來つたところを尋ねて、そこに國家的傳統を見出し、郷國、民族、傳統のいかに重んず可きを知るに至つて、一個の傳

モリス・パレスの傳統主義

統主義となつたのである。即ち、「我々の靈魂は、我々の祖先の堆積された靈魂から出來てゐる。彼等の基礎的諸觀念は、我々の存在の土臺石をなしてゐる。」といふのが、彼の考へ方の根本であつた。彼は云つてゐる。「これ（傳統）が脊推骨だ、これを持つてゐる時には、我々は我々の生活を發明する事が出来る……父祖の土地から離れても我々はまさかに根無し草ではあるまい。我々が最も貧弱な周圍に赴いて沈んでも、ここで我々は我々の父祖の繼續として残るのであらう。我々は我々が生れる前に、彼等の血管のなかで營んだと同時に、彼が我々を瞑想した其の長い間の修業から利益を收めるのであらう。」彼の傳統主義は、しかし、退嬰的な保守主義では勿論ない。祖先から受けたものを、更によりよきものとして子孫に傳へなければならぬ。祖先を忘れてはならぬ我々は、又、子孫を忘れてはならぬと考へる傳統主義は、一面から見れば、復古主義であり還元主義であるが、一面から見れば、進化主義、未來主義で、あくまでも積極的な活動主義である。而して、パレス自身、單なる文學者ではなく、一方國民黨に屬する政治家として、盛に活動してゐる。「活動しないものは思想もない、生活に接觸して生れないあらゆる觀念は價值を有つてゐない。」と彼は云つてゐる。彼の著作としては、「黒汗の痕」「パリのラテン街」等の小説の外、論文「自由の人」等がある。

ロマン・ロオランの義の世界主義

大戦起るや、モリス・パレスはその國家主義の立場から、主戰論者として活動した。が、一方、パレス等の國家主義に對して世界主義を執り、非戰論者として活動した人に、ロマン・ロオランがある。ロマン・

ロオラン(1808——)は、所謂、眞勇主義の旗幟を以て現代思想界の一角に雄視する人である。「世の中に唯一つの勇氣がある。それはあるがまゝに人生を見て、而して、それを愛する事だ。」といふの語を標語とした彼の思想に就いては、既に第二講に於て詳細に語られてゐるから、こゝに繰返さぬが、彼は、パレスの國家主義者なるに對して、四海同胞の理想を抱く世界主義者であつた。彼の描いたクリストフは獨逸にあつては獨逸の虚偽に反抗し、佛蘭西に行つては佛蘭西の懦弱に反抗した。ロマン・ロオランは實に世界に出づる爲めに民族を苦んだ人である。彼は、更に、クリストフを伊太利の旅に上せてゐるが、廣き人道の上に立脚せんには、その修養の世界的なるを要すると考へたからである。かく、ロオランはまことの意味の世界人^{コスモポリタン}であつた。だから、世界の大戰に際し、祖國佛蘭西が戰禍の中に陥ちた時も、彼は敢然として、非戰論を唱へ、「戦争の上に」の一著に於てその所信を發表した。だから、一部の佛蘭西の人々から裏切者の名を浴びせらるゝに至つたが、戦争が進むに従つて彼の周圍には同じ傾向の人々が次第に集まり來り、やがて機關紙「光明」^{クラムテ}を發行して、ペー・ジュー・ヂューヴ、マルティネット、ルネ・アルコス等の諸詩人と提携し、更に、アンリ・バルビュス、アナトール・フランスを初めとして、ハアデエ、ウエエルス、ブランデス、イバネツなど國外の諸文人を同志に得て、「世界主義の勝利を期する聯盟」を結ぶに至つた。かくて、今や、佛蘭西には、パレス等の國民主義、傳統主義と、ロオラン等の世界主義とが二つの大なる潮流として、相對してゐるものであるが、この勢力較べとなると、どうしても、國民主

義派傳統主義派の方が優勢である。カトリシズムに裏附けられた國家主義は、佛蘭西人の本來の特性を裏附けるところのもので、佛蘭西人ほど傳統的な國民は無いのである。

アナトール・フランス、マルセル・ブレボオ、ポオル・プウルジエ、ルネ・バサン、ピエル・ロチ、これ等、佛蘭西文壇の耆宿ともいふ可き人々については既に説いたから、こゝに繰返す事をしない。なほ、此の外前に説き漏らした人に、レミイ・ド・グルモン(1917)がある。批評家としても小説家としても、詩人としても、適くところとして可ならざる無き才人で、ディレクタンティズムの最大の代表者の一人と云はれてゐる。小説「ルクサンブルの夜」が最も聞えてゐる。それからアンドレ・ジイド(1869——)がある。小説「窄き門」は、新教徒の道德觀念の不完全で狹隘なることを指摘した作で、なほ、評論家としても知られてゐる。アンリ・ポルドオ(1870——)は佛蘭西の家庭生活を描いて妙を得てゐる。ポウル・アダム(1863——)は、社會小説の作家で、力強い作風を有つてゐる。それから、海軍士官で、ピエル・ロチの弟子で、ロチよりもつと快活な作風を有し、軍人生活を描いて好評を博したクロオド・ファアレ(1876——)、テオフィル・ゴオチェの娘で、曾て詩人カチュウル・マンデスの妻であつて、東洋に關した作をよくするマダム・ゴオチェ(1865——)、アンリ・ポルドオと共に、好んで佛蘭西の家庭を描き、テエマに富んだ作風を謳はれてゐるルネ・ボアレズヴ(1867——)、プロヴァンヌの小説家として知られるジャン・エイカアル(1848——)、新聞小説家として成功してゐるギイブ(1850——)等、皆、現代の佛蘭西の小説界に雄

視する人々である。既に故人となつたが、シャルル・ルイ・フィリップ(1814—1889)は、最近の佛蘭西が生んだ最も偉大なる作家の一人と稱せられる。「ビュビュド・モンパルナス」の一篇を處女作として、「母と子」「四つの悲しい愛の話」等の作がある。彼の自ら云ふところによると、彼の祖母は乞食であつたといふ。生れが生れ丈、育ちが育ちだけに彼の作品には、貧しき者虐げられたる者に對する熱い涙が藏されてゐる。ドストイェフスキイの藝術を渴仰した丈あつて寫實的な民衆的な作家で、彼自身、將來は農民や勞働者の中から立派な藝術が起つて來るであらう事を確信してゐた。それから、ロマン・ロオランの「光明」に據つて有名になつた作家に、アンリ・バルビュス(1874—)がある。戦争を材とした「砲火」といふ作で世評を博し、外に又、名篇「光」の作がある、深刻な現實主義の作家でゾラの後繼者として目せられてゐる。

パレスの傳統主義については既に述べたが、同じく國家主義の立場に立つて、カトリシズムに裏付けられた宗教的な愛國的熱情を歌つた詩人に、ポオルクロオルデ(1888—)がある。彼は、カトリックの教義のみならず、その莊重典麗な儀式を愛する事深く、「彼方の彌撒」等その儀式を讚美した多くの詩を書いてゐるが、大戦起るや、「戦の三つ詩」「戦争中のほかの詩」の二詩集を公にして、一層詩名を高めた。ルイ・フィリップの如きは、クロオデルをダンテに比してさへゐる。「二十世紀の佛國作家」の著者デクロウ夫人の如きも、非常に、クロオデルの將來に囑目して、「彼は多くの佛蘭西藝術家の中に、情熱、戰鬥、活動、激情、神祕、而して同時に物質的なものを渾一した微妙な作詩を提供する。」と云つて之を讚美して

現下佛蘭
西の詩壇

ゐる。彼は、外交官として手腕を知られ、詩の外に又劇をも書いてゐる。クロオデルと共に、愛國詩人として知られ、挺身、陣頭に立つて遂に敵弾に斃れた詩人にシャルル・ベギイ(1914)がある。又批評家として知られてゐる。ベギイは、ジャンダアクを崇拜して、その傳を書いた。クロオデルにせよベギイにせよ、皆ロマン・ロオランなどとは行きこそ方違へ、其熱烈な理想家である事に至つては同じである。獨逸文壇に於ける如く、佛蘭西文壇にも今や新しき理想主義が、旺盛として起りつゝあるのである。その他、佛蘭西現代の詩人としては、象徴主義の流を汲んだポール・フォール、ゼルレエヌの弟子であつたシャルル・モリス、プロヴァンスの詩人として知られ神祕的傾向をとつてゐるミストラアル等がある。クロオデルと傾向と同じくし、ポオル・フォオルと並び稱せられるフランシス・ジャンム、それからジュウル・ロマン、フランソア・ポルエシ、シール・ヴィドラック、ノアイエ夫人等の名を擧げる事が出来る。少し過去に遡つては、幽婉の詩風を以て知られるアルベール・サマン(1859—1900)がある。マラルメの弟子で象徴派の確立に大功のあつたアンリ・ド・レニエ()は、今なほ健在であるが、今は、詩から小説に移つて、優麗なロマンチックの作風を以て世を動かしつゝある。戦争中、「一九一四年から一九一六年まで」といふ詩集を公にしたが、その貴族的な、靜肅な格調の中に、敵に對する強い呪咀の感情が籠められてゐる。前記ポオル・フォオル、フランシス・ジャンムなど皆多くの戦争詩を發表してゐる。なほ、戦争で死んだ詩人の中に、ギヨーム・アポリネールがある。頗る異色ある詩人であつた。佛蘭西の詩人達は、大戦に於

ける未曾有の國難に際し、皆、聲を合せて愛國の歌を歌つたが、中で、ヂューヴ、マルティネット、アルコス等の人々が、ロマン・ロオランと共に、世界主義を抱き非戦論を執つて、連りに戦争を呪ふの詩を公にした事は、既に前に述べたところである。

さて、次に、佛蘭西の劇壇について一瞥しよう。喜劇「シラノ・ド・ベル・ジュラック」によつて知らるゝエドモン・ロスタンについては既に述べた。ロスタンと並んで、佛蘭西劇壇に重きをなす作家に、ユージェーヌ・ブリュウ(1858——)がある。はじめ新聞記者であつたが、後、劇作家となり、離婚問題、労働問題等、主として社會問題を取扱つてゐる。この點、英吉利のガルスワージーなどと、儔を同じうする。藝術味には乏しいが、その深刻な批判は、世を動かすに足りる。「説教するのは、私の性質である。私の劇には何れも目的がある。劇場は人を引附けるところである。私は聴衆に問題が提供したい。人生のある問題について考へさせ度い。」かう彼は、云つてゐる。その作、「獨身夫人」以下三十餘篇ある。ブリュウと同じく社會劇の作家としては、フランソア・ド・キュウレル(1854——)を擧げる事が出来る。深刻な心理解剖の裏に、新しき道德觀を示すといふやうな作風で、透明なスタイルとすぐれたる氣品とを特色とする。「獅子の饗宴」「野性の娘」「聖女の裏面」等の作がある。又、「戀愛劇の作家として、モリス・ドンネー(1859——)アンツポルト・リッシュュがあり、諷刺的の作風を有するアンリイ・ラブダン、アルフレ・カピエー、ジュール・ルメエトル等の名も記憶してゐる必要がある。ルメエトルは、批評家として聞えてゐるが

現代佛蘭西の劇壇

劇作家としてもまた一流の大家である。それから、サルドウの直系を踏んでゐる作家に、アンリ・ベルンスタインがある。前に述べたキュレル、及びアンリイ・パタイユなどと共に、矢張、社會劇、思想劇とも目す可き作風の作家である。まだ、澤山あるやうだが、この位にしておく。

(九) 南歐の新星イバネツ

伊太利の文家ガブリエレ・ダンヌンツィオの大戦中の活躍、乃至大戦後のヒュウメ問題に對する英雄的行動については、ここに説くまでも無からう。ダンヌンツィオと並び稱せられたフォガツツアロにはもう疾うに死んで了つて、伊太利文學では、今のところ、矢張、ダンヌンツィオほどの世界的大名を見出す事が出来ないが、閩秀作家マチルド・セラオの如きは、十分注目す可き作家であらう、その作に「羅馬の征服」「踊子」「最後の愛」などがある。ゾラやモオバスサンの影響を受けた自然主義の作者であるが、最近神祕主義の方に一步を進めつゝあると云はれる。

西班牙の現代作家としては、プラスコイバネツ(1866——)が、今や、世界的作家としての名聲を博しつつある。イバネツは、社會主義的傾向を多分に有つた、社會改造の精神の熾盛な作家である。彼は、西班牙政府と教會とに挑戦し、その爲めに幾度か牢に入られた事がある。又、新聞雜誌の記者として、科學社會學の翻譯者として活動し、共和黨の一議員となつて、大に反政府熱を鼓吹しました。云ふまでも

現代伊太利の文壇

プラスコイバネツ

なく理想主義の作家である。その作には、「點示録の四騎手」「我等の海」などがある。いづれも、歐洲大戰に材を得たもので、スケエルの大きな作である。それから、イバネツと共に、西班牙文壇に謳はれてゐる作家に、ピオ・パロジャ(1872——)がある。「用心深い町」「シイザアかナツシングか」などの作がある。イバネツと同じく、熱烈な理想家で、改造的精神に燃えてゐる作家で、その作はイバネツの作ほどスケエルが大きくない代り、繊巧な技巧をもつてゐる。以上二人の外に、ブルテス、バルドオ・バサン、ガルトスなどの作家がある。ブルテスと、バサンとは、ゾラやゴックウルの流を汲んだ自然主義的傾向の作家である。一般に、西班牙文學の特徴としては、その郷土色の著しい事を擧げる事が出来る。

(十) 新理想主義の勃興

さて、以上に於て、不完全ながら、世界文壇の現勢について語つたが、大體を通觀して先づ感じられる事は、新しい理想主義の勃興といふ事である。世界の文藝は、今や、翕然として、理想主義的傾向に向ひつゝあると云つて差支へがない。まづ、佛蘭西を見よ。佛蘭西の文壇の中心勢力をなしてゐるものはロマン・ロオランにせよ、モリス・パレスにせよ、皆、熱烈な理想主義者である。消極的な懷疑は、今や過去のものとなつた。皆、輝かしい光明を前途に認めつゝ勇敢に突進しつゝあるのである。獨逸の表現主義の如きは、あまり急進的過ぎると思はれるほどの理想主義文學である。北歐に至つて、ハムズン、

新理想主義の勃興

エール、亦、昔日の自然主義の諸作家には見られぬ理想と情熱とに充たされてゐる。——これを要するに、今や、世界の文學は、全く物質的自然主義の繫縛から放たれて、理想主義の一路を勇敢に進みつゝあるのである。

——近代文藝十二講了——

近代文學年表

- 一、本年表は一八〇〇年即ち十九世紀以降の文學者及び作品を主として作れるもの也。
- 二、一九一六年以後は、追て増補す可し。なほ、記載に漏れたるもの多々ある可きも、重版を機として、増補す可し。
- 三、表中(瑞)(白)(那)(波)(匈)(西)等とあるは、瑞典、那威、波蘭、匈牙利、西班牙等の略號也。
- 四、作品は、最も有名なるものに限りにて記せり。(編者記)

1807	1805	1804	1803	1802
◎ロングフェロオ(米)生る	◎シルレル(獨)死す ◎アンデルセン(獨)生る	◎シルレル(獨)の「ウイールヘルム・テル」出づ ◎フウプ(佛)◎ジスレリー(英)◎ホオソオン(米)生る	◎リュットン(英)生る ◎アルフイエリ(伊)◎ヘルデル(獨)◎エマアスン(米)◎クロプストック(獨)死す	◎ユウゴオ(佛)◎レナウ(獨)生る
1812	1811	1810	1809	1808
◎バイロン(英)の「チャイルド・ハロルド」出づ	◎サツカレエ(英)◎ゴオチエ(佛)生る ◎クライスト(獨)死す	◎テオドル・ケルネル(獨)死す ◎シヨオパン(獨、作曲家)生る	◎ボオ(米)◎テニスン(英)◎デアキン(英)生る ◎ミュッセ(佛)生る	◎ゴオゴリ(英)生る
	◎ナホレオン一世、露國に侵入す、これより露西亞は國民的自覺を喚起され、國民文學勃興の機運動く ◎ブラウニンガ(英)◎ディッケン(英)◎アウエルバッハ(獨)生る	◎スコット(英)の「湖上の美人」出づ		

1821	1820	1819	1818	1815	1814	1813
◎キイツ(英)死す	◎ル・コンド・リイル(佛)生る ◎キイツ(英)の「セント・アグネスの速夜」出づ	◎アアギンカ(米)の「スケッチ・ブック」出づ ◎エリオット女史(英) ◎ホイットマン(米) ◎フォンタブネ(獨)生る	◎ツルゲエネフ(露)生る	◎シエレエ(英)生る	◎レルモントフ(露)生る	◎ゴンチャロフ(露)◎ヘッセル(獨)◎ワグネル(獨)生る
1828	1827	1825	1824	1823	1822	
◎モンテイ(伊)死す	◎ボオ(米)の第一詩集出づ ◎ブレエク(英)◎ベエトオフエ(獨、音楽家)死す	◎モンテエヌ(佛)◎ヨオカイ(獨)生る	◎小デユウマ(佛)生る ◎バイロン(英)死す	◎ルナン(佛)◎オストロオフスキ(露)生る	◎バイロン(英)の「カイン」◎シエレエ(英)の「アドネイス」出づ ◎エドモン・ゴンクウル(佛)◎マシウ・アノルド(英)生る ◎フウシキン(露)の「高加索の囚人」出づ ◎シエレエ(英)死す	
1833	1832	1831	1830	1829		
◎ヨナス・リイ(那)◎マホエ(佛、印度派の畫家)生る	◎エチガライ(西)◎ピョルンツ(那)生る ◎フウシキン(露)の「エウジニイ・オホエギン」完成す ◎スコット(英)◎ゲエテ(獨)死す	◎ゲエテ(獨)の「ファウスト」完成す ◎ヘゲル(獨)死す ◎ユウゴオ(佛)の「鐘樓守」出づ	◎ユウゴオ(佛)の「エルナニ」出づ、佛蘭西文壇に於ける浪漫主義の頂點に達せる時也 ◎ジュウル・ゴンクウル(佛)◎パウル・ハイゼ(獨)◎サルドオ(佛)生る	◎ダアキン(英)の「種の起原」出づ ◎ミレエ(英、畫家)生る		

1840	1839	1838	1837	1836	1835	1834
◎レルモントフ(露)死す	◎リオルター・ペエター(英)生る	◎カルツツチ(伊、詩人)生る	◎スキンバアン(英)生る ◎フウシキン(露)◎レオバルデイ(伊)死す	◎ゴオゴリ(露)の「檢察官」出づ	◎マアク・トウエン(米)生る	◎ヌネス(西)◎ホキッスラア(米)生る ◎コホルリツザ(英)◎チャアルス・ラム(英)死す
1844	1843	1842	1841			
◎ポオ(米)の「大鷄」出づ ◎エルレエヌ(佛)◎アナトオル・フランス(佛)◎ニイチェ(露)生る ◎リアズラアス(英)の新詩風は勝利を認められ、英吉利浪漫主義(或は自然主義)文學の基礎漸く堅し	◎リアズラアス(英)桂冠詩人に擧げらる ◎サジイ(英)死す	◎マラルメ(佛)◎フォガツツアロ(伊)生る ◎ユウゴオ(佛)の「伯爵家」上場の際群衆の中より嘲弄の聲起る、浪漫主義漸く下火也	◎ピサレフ(露)◎ブランデス(丁)◎フォオキン・ミラア(米)生る ◎ディッケンズ(英)の「クリスマス・カロール」◎カアライル(英)の「英雄崇拜論」出づ			
1848	1847	1846	1845			
◎ポオ(米)◎シヨオバン(獨)死す ◎ブリュンチエ(佛)◎ラスキン(英)◎エドモンド・ゴッス(丁)	◎ホイズマンズ(佛)生る ◎シャトオ・リアン(佛)死す ◎ロセツチ(英)等のラファエル前派(P.R.B.)の結社成る ◎露西亞文學に對する官憲の壓迫甚しきこと、此年より一八五五年に至る	◎ゴンチャロフ(露)の「コンモン・ストオリイ」出づ ◎ツルゲエネフ(露)故國を去る ◎スクラアム(那)生る	◎ツルゲエネフ(露)の「獵人日記」◎ドストイェフスキ(露)の「貧しき人々」出づ ◎シエンキウイッチ(露)生る	◎ワグネル(獨)の「タンホイゼル」を作る		

1862	1861	1860
<ul style="list-style-type: none"> ◎メエテルリシク(自) ◎ハツプ トマン(自) ◎アレゾオ(佛) ◎ シユニツレル(自)生る ◎ツルゲエネフ(露)の「父と子」 ◎フロオベル(露)の「サランホ オ」出 ◎下オデエ(露)の「粉小屋より」 出ではじむ 	<ul style="list-style-type: none"> ◎ホオドレエル(露)の「人爲樂 園」◎ドストイェフスキイ(露) の「虚げられし人々」及び「死 人の家」出 ◎ハインツ・トフオテ(露)生る ◎露西亞に農奴解放令布かる 	<ul style="list-style-type: none"> ◎ツルゲエネフ(露)の「初恋」◎ ピヨルンソン(露)の「幸福なる 少年」出 ◎シヨオベンハウエル(露)死す ◎チエホフ(露)◎オゴラ・ハンソ ン(露)生る
1866	1865	1864
<ul style="list-style-type: none"> ◎ドストイェフスキイ(露)の「罪 と罰」◎イブセン(露)の「ブラ ンド」◎エルレエヌ(露)の第一 詩集出 ◎メレヅニコウスキイ(露)生る 	<ul style="list-style-type: none"> ◎スキンバアン(英)の「アタラン タ」出 ◎キンプリンド(英)生る 	<ul style="list-style-type: none"> ◎ゴンクウル兄弟(露)の「ジェル ミニイ・ラセルトオ」出 ◎イブセン(露)容れられずして 故國を去る ◎トルストイ(露)「戦争と平和」 に着手す
1869	1868	1867
<ul style="list-style-type: none"> ◎トルストイ(露)「戦争と平和」 を完成す ◎アアサア・シモンズ(英)生る ◎ラマルチイヌ(佛)◎サント・プ ウブ(露)死す ◎フロオベル(露)の「感情教育」 ◎イブセン(露)の「青年結社」 出 	<ul style="list-style-type: none"> ◎ゴオリキイ(露)◎ピサレフ(露) ◎ロスタン(露)生る 	<ul style="list-style-type: none"> ◎ギツピウス女史(メレヅニコウ スキイ夫人)◎バリモント◎ ガルスワアツイ(英)生る ◎ツルゲエネフ(露)の「スモオ ク」出 ◎ホオドレエル(露)死す ◎ホイズマンズ(露)公然、師ゾラ と絶縁して、象徴主義の旗幟 を樹つ

1853	1852	1851	1850	1849
<ul style="list-style-type: none"> ◎ルメエトル(露)◎コロオレン コ(露)生る 	<ul style="list-style-type: none"> ◎ゴオゴリ(露)自殺す ◎バルドオ・バサン(露)生る ◎プウルツエ(露)生る ◎トルストイ(露)の「コサック」出 づ 	<ul style="list-style-type: none"> ◎レナウ(露)◎バルザック(露)死 す 	<ul style="list-style-type: none"> ◎モオバスサン(露)◎ピエル・ロ チ(露)◎ステイアンソン(英)◎ マネザクトソン(露)生る ◎ホオソオン(露)の「緋文字」出 づ 	<ul style="list-style-type: none"> ◎ランド(露)◎カイ(露)◎スト リンドベルク(露)生る ◎ドストイェフスキイ(露)ペト ラセエフ事件に坐し断頭臺に 上りしが、助命せられて、西比 利亞に流さる
1856	1855	1854		
<ul style="list-style-type: none"> ◎フロオベル(露)「ボヴリー夫 人」を脱稿す ◎ウイリアム・アアチャ(英)◎ オスカア・ワイルド(英)◎バア ナアド・シヨオ(英)◎ボタアバ ンコ(露)生る ◎ワアズワアス(英)◎ハイネ(露) 死す ◎シヨオシ・ムウア(英)◎ズウデ 	<ul style="list-style-type: none"> ◎イブセン(露)の「ヘルゲランド の海豪」及「戀愛喜劇」◎ツル ゲエネフ(露)の「ルウゲン」出 ◎ホイットマン(露)の詩集「草の 葉」出で、大膽なる詩風世を驚 かす ◎ガルシン(露)◎アアサア・ピネ ロ(英)◎エルハアレン(自)生る 	<ul style="list-style-type: none"> ◎トルストイ(露)の「セバストポ オリ物語」◎ケルレル(露)の 「緑色のハインリヒ」出 ◎ゴットヘルフ(露)死す 		
1859	1858	1857		
<ul style="list-style-type: none"> ◎ツルゲエネフ(露)の「その前 夜」出 ◎コナン・ドイル(英)◎ジエロム・ ケイ・ジエロオム(英)◎ベルグ ソン(露)生る ◎マコオレエ(英)◎アアギン グ(露)死す 	<ul style="list-style-type: none"> ◎イエーツ(英)◎エツアル・ロッ ド(露)◎ラゲルレエフ女史(露) ◎ガイエルスタム(露)生る ◎ピヨルンソン(露)の「アルネ」 出 	<ul style="list-style-type: none"> ルマン(露)生る ◎タアナア(英)◎ミユッセ(露) 死す ◎ゴンチャロフ(露)の「オプロー モフ」◎ホオドレエル(露)の「悪 の華」◎ピヨルンソン(露)の「シ イノオア・ソルバツケン」出 ◎ツルゲエネフ(露)の「貴族の家」 出 		

1873	1872	1871	1870
<ul style="list-style-type: none"> ◎トルストイ(露)「アンナ・カニナ」の稿を起す 	<ul style="list-style-type: none"> ◎マンツォニ(伊)◎リットン(英)死す ◎グレルバルツェル(露)◎ゴオチエ(佛)死す ◎フランデス(丁)「十九世紀文學の主潮」を公にし始む 	<ul style="list-style-type: none"> ◎アンドレエフ(露)生る ◎スキンパアン(英)の「日の出前」の歌「出づ」 ◎シング(英)生る 	<ul style="list-style-type: none"> ◎クウプリン(露)生る ◎小ヤユウマ(佛)◎ジュウル・ゴックウ(佛)◎ディッケンズ(英)死す ◎ヅラ(佛)「ルウゴン・マッカアル小説叢書」を公にし始む
1877	1876	1875	1874
<ul style="list-style-type: none"> ◎トルストイ(露)此年を轉機として宗教的傾向に傾く 	<ul style="list-style-type: none"> ◎シオルジ・サンド(佛)死す ◎ツルゲエネフ(露)の「處女地」出づ 	<ul style="list-style-type: none"> ◎アンデルセン(丁)◎コロオ(佛)死す ◎「青年」出づ 	<ul style="list-style-type: none"> ◎ホフマンスタアル(佛)◎ペアリング(英)◎チエスタアト(英)生る ◎トルストイ(露)の「アンナ・カニナ」◎ドストイエフスキイ(露)の「青年」出づ
1880	1879	1878	
<ul style="list-style-type: none"> ◎ドストイエフスキイ(露)の「カラマーゾフ兄弟」出づ 	<ul style="list-style-type: none"> ◎フロオベル(佛)◎エリオット(英)死す ◎モオバスサン(佛)の「脂肪の塊」出づ ◎ヅラ(佛)の「實驗小説論」出づ、「ルウゴン・マッカアル小説叢書」の中の「ナナ」出づ 	<ul style="list-style-type: none"> ◎ストリンドベルグ(瑞)の「赤い室」出づ、瑞典に於ける最初の自然主義作物也 ◎メレディス(英)の「エゴイスト」出づ 	<ul style="list-style-type: none"> ◎ツルゲエネフ(露)歸國してトルストイ其他と交遊を新にす ◎アルツイバアセフ(露)◎プライヤント(米)生る ◎イアセン(那)の「人形の家」出づ

1883	1882	1881	1884	1885	1886	1887	1888	1889
<ul style="list-style-type: none"> ◎「新アラビア夜話」◎ビヨルンソン(那)の「手套」出づ 	<ul style="list-style-type: none"> ◎ロンガフェロオ(米)死す ◎ロセツチ(英)◎エマアスン(米)出づ ◎ラグネル(露)◎マネエ(佛)◎ツルゲエネフ(露)死す ◎モオバスサン(佛)の「女の一生」◎ステイブソン(英)の「寶島」 	<ul style="list-style-type: none"> ◎アナトオル・フランシス(佛)の「シルエスト・ボンナアルの罪」◎イアセン(那)の「幽霊」出づ ◎ドストイエフスキイ(露)◎シスレリイ(英)◎カアライル(英)死す ◎ニイチエ(露)の「歡びの智慧」出づ ◎デアキン(英)◎アウエルパツハ(露)死す ◎トルストイ(露)の「我が懺悔」出づ 	<ul style="list-style-type: none"> ◎ホイズマンズ(佛)の「ア・ルパウル」◎イアセン(那)の「鳴」出づ ◎ユウゴオ(佛)死す ◎モオバスサン(佛)の「ベル・アミ」◎ニイチエ(露)の「ツアラトウストラ」◎ハウプトマン(露)の「日の出前」◎トルストイ(露)の「我が宗教」出づ 	<ul style="list-style-type: none"> ◎ニイチエ(露)の「善惡の彼岸」 ◎イアセン(那)の「ロスマルス・ホルム」◎トルストイ(露)の「闇の力」出づ ◎オストロフスキイ(露)死す 	<ul style="list-style-type: none"> ◎ズワデルマン(露)の「フラウ・ゾルゲ」◎マラルメ(佛)の「全集」◎ストリンドベルグ(瑞)の「父親」出づ ◎マラルメ(佛)の「ホオの詩」を翻譯して公にす 	<ul style="list-style-type: none"> ◎ズワデルマン(露)の「猫橋」◎ホルツ及びツユラフ(露)合作の「父ハムレット」◎メエテルリント(自)の「マレイヌ姫」◎トルストイ(露)の「クロイツェル・ソナタ」◎ダンメンツィオ(伊)の「快樂兒」出づ ◎シエレエ(米)◎ベヂネクトツン(瑞)◎アラウニング(英)◎マシウ・アアノルド(英)死す 	<ul style="list-style-type: none"> ◎イアセン(那)の「海の夫人」◎ニイチエ(露)の「權力意志」及び「此人を見よ」◎フランデス(丁)の「露西亞印象記」出づ ◎ガルシン(露)死す ◎キツプリング(英)の「ブレエ・テエルス」及び「三兵士」出づ ◎ハウプトマン(露)の「日の出前」上場、獨逸劇壇に一新紀元を劃す 	<ul style="list-style-type: none"> ◎ハウプトマン(露)の「日の出前」上場、獨逸劇壇に一新紀元を劃す

	1891	1890
	<ul style="list-style-type: none"> ◎モオパスサン(佛)發狂す ◎ハウプトマン(獨)の「淋しき人々」◎ズワデルマン(獨)の「ソドム最後の」◎ハアアエ(英)の「テス」出づ ◎ゴンチャロフ(露)死す 	<ul style="list-style-type: none"> ◎アナトオル・フランス(佛)の「ダイス」◎メテルリンク(自)の「群盲」◎ハウプトマン(獨)の「平和祭」◎ズワデルマン(獨)の「名譽」◎シェンキイウイチ(波)の「火と劍」出づ ◎フォンタアネ(獨)◎ゴットフリッド・ケルレル(瑞)死す ◎ヘルマンバル(獨) 維也納に來りて象徴主義を宣傳す
	1893	1892
	<ul style="list-style-type: none"> ◎フランス(佛)の「紅百合」◎ハウプトマン(獨)の「ハンネレの昇天」◎ズワデルマン(獨)の「故郷」◎ストリンドベルグ(瑞)の「痴人の懺悔」◎イアセン(那)の「皇帝とガラリヤ人」◎シユニツレル(獨)の「アナトオル」◎ショオ(英)の「ウオオレン夫人の職業」出づ ◎ル・コンド・リイル(佛)死す 	<ul style="list-style-type: none"> 及び「ドンチャンの子」◎ダンヌツイオ(伊)の「犠牲」◎オスカア・ワイルド(英)の「サロメ」出づ ◎テニス(英)◎ホイットマン(米)◎ルナン(佛)死す ◎モオパスサン(佛)自殺す ◎ゾラ(佛)「ルウゴン・マツカアル小説叢書」を完成す ◎テエヌ(佛)死す
	1895	1894
	<ul style="list-style-type: none"> ◎小チユウマ(佛)◎モンテエヌ(佛)死す ◎ホイズマンズ(佛)の「途上」◎ゴオリキイ(露)の「チエルクシユ」出づ ◎メテルリンク(自)の「貧者の寶」出づ 	<ul style="list-style-type: none"> ◎マラルメ(佛) 英國のオックスフォード大學及びケンブリッヂ大學に於て「文字と音樂」なる講演を爲す ◎ダンヌツイオ(伊)の「死の勝利」◎メテルリンク(自)の「タンタイルの死」◎ヴェデキンド(獨)の「春機發動」◎シユニツレル(獨)の「死」◎イアセン(那)の「小さなアイヨルフ」◎キップリング(英)の「ジャンガル・ブック」等出づ ◎ステイアンソン(英)◎ウオールドア・ペエタア(英)死す

	1897	1893				
	<ul style="list-style-type: none"> ◎オスカア・ワイルド(英) 男色事件によりて獄に繋がる ◎エドモン・ゴンクワル(佛)◎エルレエヌ(佛)死す ◎アレボオ(佛)の「情人の告白」◎メテルリンク(自)の「アグラエヌとセリセツト」◎ダンヌツイオ(伊)の「巖上の處女」◎ハウプトマン(獨)の「沈鐘」◎シェンキウイチ(波)の「何處へ行く」出づ ◎ミレエ(英)死す ◎ドオデエ(佛)死す ◎ヴェデキンド(獨)の「地靈」上場さる。作者自ら其副主人公に扮す ◎ロスタン(佛)の「シラノ・ド・ベルジュラック」◎イアセン(那)の「ホルクマン」◎オスカア・ワイルドの「獄中記」出づ 	<ul style="list-style-type: none"> ◎ドレフエ事件に對し、ゾラ(佛)大膽なる公開狀を掲げて政府を諷す ◎ホイズマンズ(佛)の「ラ・カセドラル」◎メテルリンク(自)の「智慧と運命」◎ハウプトマン(獨)の「馭者ヘンシエル」◎トルストイ(露)の「藝術論」出づ ◎ロオデンパッハ(自)死す ◎ゾラ(佛)「四福音書」の中の「多産」を公にす ◎イアセン(那)の「蘇生の日」出づ 				
	1900	1899	1898			
	<ul style="list-style-type: none"> ◎ゾラ(佛)「四福音書」の中の「真理」を公にす ◎アレボオ(佛)の「強き處女」◎メテルリンク(自)の「蜂の生活」◎トルストイ(露)の「復活」◎チエホフ(露)の「鷗」出づ ◎ニイチエ(獨)◎オスカア・ワイルド(英)◎ラスキン(英)死す 		<ul style="list-style-type: none"> ◎ゾラ(佛)「四福音書」の中の「多産」を公にす 			
	1905	1904	1903	1902	1901	
	<ul style="list-style-type: none"> ◎ハウプトマン(獨)の「エルガ」◎クワプリン(露)の「決闘」◎アンドレエフ(露)の「赤き笑」出づ 	<ul style="list-style-type: none"> ◎チエホフ(露)の「櫻の園」出づ ◎チエホフ(露)◎ヨオカイ(匈)死す 	<ul style="list-style-type: none"> ◎シヨオ(英)の「人と超人」出づ ◎メネス(伊)◎ギツシング(英)◎ホイッスラア(米)死す 	<ul style="list-style-type: none"> ◎ゾラ(佛)死す ◎ハウプトマン(獨)の「哀れなるハイリツヒ」◎フレンセン(獨)の「イエレン・ウアル」◎メテルリンク(自)の「モンナ・ガンナ」◎アンドレエフ(露)の「霧」及び「深淵」出づ 	<ul style="list-style-type: none"> ◎ダンヌツイオ(伊)の「フランセスカ・ダ・リミニ」上場せらる ◎ゾラ(佛)死す 	<ul style="list-style-type: none"> ◎ゾラ(佛)の「哀れなるハイリツヒ」◎フレンセン(獨)の「イエレン・ウアル」◎メテルリンク(自)の「モンナ・ガンナ」◎アンドレエフ(露)の「霧」及び「深淵」出づ

1908	1907	1906			1909	1910	1911	1912	1913	1915	1916
◎スクラアム(那)死す ◎イブセン(那)◎キイランド(那)死す ◎フオガツアロ(伊)の「聖者」出づ ◎トルストイ(露)の「シエクスピイヤ論」出づ ◎ガルスワアジイ(英)の「銀の匣」出づ	◎ホイズマンズ(佛)死す ◎メエテルリンク(自)「青い鳥」出づ ◎シユニツツレル(奥)の「廣野の道」出づ	◎サルドオ(那)◎ヨナス・リイ(那)死す ◎アルチバアセフ(露)の「サアニン」出づ、サアニズムの呼聲高し	◎エツアル・ロッド(佛)◎プリュンチエル(佛)◎ガイエルスタム(瑞)◎シンク(英)◎スキンバアン(英)◎メレディイス(英)死す ◎クウプリン(露)の「ヤアマ」◎ソログウブ(露)の「かくれんぼ」出づ	◎トルストイ(露)◎ピョルンソ(那)死す	◎フオガツアロ(伊)死す ◎ハウプトマン(獨)の「鼠」出づ ◎ストリンドベルグ(瑞)死す ◎ガルスワアジイ(英)の「鳩」出づ	◎ミラア(米)死す ◎曾て放逐せられ伊太利カプリ島に流寓せるゴオリキイ(露)歸國を許すの命に接して之を謝絶す	◎ロマン・ロオラン(佛)ノベル賞を受く ◎エチエガライ(獨)◎シエンキウイチ(波)逝く				

近代文藝二十講

大正十年八月十二日印刷
 大正十年八月十八日發行
 昭和三年一月十五日三十六版

編輯兼發行者 佐藤義亮

發行所 新潮社

東京市牛込區矢來町

電話牛込 一八八八八
 長 二〇〇〇〇
 一七四二番 四九八七六番番番番

東京小石川區江西戸川町 富士印刷株式會社印刷

定價貳圓參拾錢
 郵送料拾貳錢

思想・文藝・講話叢書

四六版總洋布・紙數約五百頁
價貳圓七拾錢・郵送料拾貳錢
但(一)は貳圓(三)は貳圓參
拾錢(四)十二參圓五拾錢

(1) 近代思想十六講	中澤 臨川著	(11) 東洋思想十六講	高須芳次郎著
(2) 社會問題十二講	生田 久雄著	(12) 歐洲繪畫十二講	伊達俊光著
(3) 近代文藝十二講	生田長江・森田草平 野上白川・昇曙夢	(13) マルクス十二講	高島素之著
(4) 近代劇十二講	楠山正雄著	(14) トルストイ十二講	昇 曙夢著
(5) 改造思想十二講	宮島新三郎著 相田隆太郎著	(15) 東洋文藝十六講	高須芳次郎著 近
(6) 本日近世文學十二講	高須芳次郎著	(16) 獨逸文學十二講	三井光彌著
(7) 本日現代文學十二講	高須芳次郎著	17 進化思想十二講	小栗慶太郎著
(8) 小説研究十六講	木村 毅著	(18) 經濟思想十二講	安倍浩著 近
(9) 婦人問題十六講	奥 うめお著	(19) 世界宗教十六講	相田隆太郎著 木村 毅著
(10) 社會學十二講	杉山 榮著		

以下續々刊行

トスルトイ著作

□ 戰爭と平和 (全四冊)	昇 曙夢氏譯	▼ 各貳圓五拾錢 送料各拾貳錢
□ アンナ・カレニナ (全三冊)	原 白光氏譯	▼ 各貳圓五拾錢 送料各拾貳錢
□ 復活 (普及版)	中島 清氏譯	▼ 價貳圓 送料拾貳錢
□ 我が懺悔	相馬御風氏譯	▼ 定價七拾五錢 送料六錢
□ 我が宗教	生田長江氏譯	▼ 定價九拾錢 送料四錢
□ 人生論	相馬御風氏譯	▼ 定價五拾五錢 送料四錢
□ 性慾論	相馬御風氏譯	▼ 定價五拾五錢 送料四錢
□ 光あるうち光の中を歩め	阿部次郎氏譯	▼ 定價六拾五錢 送料四錢
□ 人は何つてよ生きるか	昇 曙夢氏譯	▼ 定價六拾五錢 送料六錢
□ イワンの馬鹿	福士幸次郎譯	▼ 定價七拾錢 送料六錢
□ 幼年・少年	江馬 修氏譯	▼ 定價八拾錢 送料八錢
□ 地主の朝	田中 純氏譯	▼ 定價八拾錢 送料八錢
□ 贖造手形	山内封介氏譯	▼ 定價八拾錢 送料八錢

・編 會 協 家 藝 文・

■年刊日本小説集

四六判紙裝
各册五百頁
價各貳圓づゝ
送料各拾錢

第一集・大正十四年版

第三集・昭和三年版

第二集・大正十五年版

毎年一回づゝ出版する年刊小説集で、各册、最近の文壇に活躍せる約三十家の代表作一篇づゝを採つて成せるもの。流派の錯綜と、傾向の多角と、個性の自由と、分野の濶大と、現下小説界の壯觀は、曾て見ざる所、従つて色彩の豊富なる事、此の一卷の如きは、他に類例を見る事が出来ない。

■年刊日本戯曲集

四六判紙裝
四百六十頁
價各貳圓づゝ
送料各拾錢

第一集・大正十四年版

第三集・昭和三年版

第二集・大正十五年版

現代劇文壇の代表作家の、最近一ケ年間の作品中より代表的ものを輯めて一卷となし、毎年刊行を繼續して、やがて事實に於て一系の『現代大戯曲全集』たらしむる方針の下に編輯したるもの。なほ添ふるに、各作家の作品目録、作品梗概等を以てし、戯曲年鑑としての利便をも併せてゐる。

■代表的名作選集

明治大正に互れる
傑作中の眞傑作集

羽二重表紙特製
定價五拾五錢
郵送料各六錢

第一 牛肉と馬鈴薯 國木田獨歩	十六 別れた妻 近松秋江	卅一 啄木選集 石川啄木
第二 坊っちゃん 夏目漱石	十七 はつ 姿 小杉天外	卅二 運命の丘 島村抱月
第三 蒲 團 田山花袋	十八 お艶殺し 谷崎潤一郎	卅三 和 解 志賀直哉
第四 透谷選集 北村透谷	十九 俳諧 師 高濱虚子	卅四 末 枯 久保田万太郎
第五 春 (全三冊) 島崎藤村	二十 煤煙 (全二冊) 森田草平	卅五 善心惡心 里見 弴
第六 わが袖の記 高山樗牛	廿一 花 枕 正岡子規	卅六 俊 寛 菊池 寛
第七 たけくらへ 樋口一葉	廿二 そ の 妹 武者小路實篤	卅七 將 軍 芥川龍之介
第八 爛 れ 徳田秋聲	廿三 旅 役 者 長田幹彦	卅八 涓 滴 森 林 太郎
第九 平 凡 二葉亭四迷	廿四 物言はぬ顔 小川未明	卅九 泉 谷 集 有島武郎
第十 高 野 聖 泉 鏡 花	廿五 ふところ日記 川上眉山	四十 蝙蝠の如く 有島生馬
十一 何 處 へ 正宗白鳥	廿六 鱧 の 皮 上 司 小 劍	四一 子をつれて 葛西善藏
十二 今 戸 心 中 廣津柳浪	廿七 女 作 者 田村俊子	四二 白秋詩歌選 北原白秋
十三 耽 溺 岩野泡鳴	廿八 南 小 泉 村 眞 山 青 果	四三 佗しすぎる 佐藤春夫
十四 明治詩歌選 詩壇六名家	廿九 少年 行 中 村 星 湖	四四 苦の世界 宇野浩二
十五 戀 ざ め 小 栗 風 葉		

<p>■自然主義戯曲<small>との十一幕物</small></p> <p>ストリンドベルク 楠山正雄氏譯 價參圓五拾錢 郵送料拾貳錢</p>		<p>■ダマスキスへ外二篇</p> <p>ストリンドベルク 楠山正雄氏譯 價參圓五拾錢 郵送料拾貳錢</p>		<p>■罪と罪及死の舞踏</p> <p>ストリンドベルク 三井光彌氏譯 (目下印刷中)</p>		<p>■祝祭曲と小劇場曲</p> <p>ストリンドベルク 楠山正雄氏譯 價參圓五拾錢 郵送料拾貳錢</p>		<p>泰西</p> <p>戯曲選集</p>	
(1)ロミオとジュリエット	シエクスピヤー 久米正雄氏譯	(7)地 靈 <small>(附)のバンドラ</small>	ウエデキンズ 楠山正雄氏譯	(2)青い鳥	メテリリク 楠山正雄氏譯	(8)悪魔の弟子	パナードシオ 市川又彦氏譯	(3)人形の家	イフセ 中村吉藏氏譯
(4)ハムレット	シエクスピヤー 久米正雄氏譯	(9)ユウデイト	ヘツベ 中島清氏譯	(5)シラノ・ド・ラック	ロスタタ 楠山正雄氏譯	(10)朝から夜中まで	カイゼ 北村喜八氏譯	(6)ソクラテス	ストリンドベルク 福田久道氏譯
(11)モンナ・ヴァナ	メテリリク 山内義雄氏譯	(12)オセロ	シエクスピヤー 久米正雄氏譯						

各册特製二百頁◆價各九拾錢◆送料各六錢

終